



国際高等研究所

年次報告書 **2023**年度
ANNUAL REPORT

International Institute for Advanced Studies

国際高等研究所

年次報告書 2023 年度 ANNUAL REPORT

CONTENTS

ごあいさつ	3
基本理念・ミッション	5
高等研のあゆみ	7
研究活動	9
自主研究	
科学技術の動向とロボティクスの将来 ～ロボティクスと家庭の関係～	11
持続可能でレジリエントな社会実現に向けた 学際共創の方法の開発と実践研究	13
人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 ～関係性との関連を手がかりに～	15
公募研究	
グローバルな分配的正義を促進する 科学システムと科学者の役割に関する研究	17
交流活動	19
けいはんな「エジソンの会」	19
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト	21
IIAS塾ジュニアセミナー	23
学生の学生による学生のための教養講座	25
学術交流／きづミーティング(集合知ネットワーク構築プロジェクト)	26
トピックス	27
研究企画推進会議	28
財務・決算報告	29
組織	31
施設紹介	33

本アニュアルレポートに記載されている所属・役職は特記されているものを除き
2024年4月1日現在、もしくはイベント開催当時のものです。



Beyond Boundariesの精神のもと 多様な研究者の分野横断的な連携や協業を推進します

国際高等研究所(高等研)は関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)の中核研究所として「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」ことを基本理念に1984年に創設され、今年で40年を迎えます。

高等研は設立以来、研究領域、世代、組織、国籍を越えて研究者が集い、人類社会が直面する課題を研究する「Beyond Boundaries」を特徴とする研究所として活動して参りました。

近年は地球の温暖化や地政学リスク、感染症による新たなパンデミックなど国際社会を取り巻く課題が大きく変化している一方で、新技術の開発スピードも加速され、AIやデジタル技術などIT関連技術などが進化し、新たな課題も顕在化しています。このような課題を解決していくためには、科学技術を進化させるだけでなく、国際社会が目指すべき将来の姿を明らかにして、新技術の活用方法や人類へのインパクトも研究しながら、多様な方法で人類のウェルビーイングを追求することが重要な時代になっています。

今日、多岐にわたる社会課題に対応するために、国際機関、組織等から「知の統合」「学際共創」「総合知」等の概念や研究

手法が提唱されていますが、これらは「Beyond Boundaries」を旨とした高等研の取組の重要性が改めて評価されたものであり、高等研としても新たな取組として、若手研究者をはじめ多様な研究者の分野横断的な連携や協業を促進するための交流イベントも全国規模で展開したいと考えています。

2025年には大阪・関西万国博覧会が開催され、けいはんな学研都市でも「未来社会への貢献～次世代への解～」をテーマに、けいはんな万博2025の開催が計画されています。創設40周年を迎えた高等研も、けいはんな学研都市の中核機関としてけいはんな万博開催に協力し、国際社会の変化を予測しながら、松本紘所長と共に、更なる成長・発展を目指してまいりますので、皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

公益財団法人
国際高等研究所

理事長 上田 輝久

株式会社島津製作所 代表取締役 会長



知の力を信じ、研究者を支え人類の未来に貢献します

国際高等研究所(高等研)は、初代理事長の奥田東先生が提唱された基本理念「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」に基づき、人類社会が直面する諸課題の探索から解決に向けて、創設以来さまざまな研究を進めてまいりました。今、人類は、地球温暖化をはじめとする環境問題、感染症、エネルギー、食料、災害といった地球規模の課題に向き合う時がきています。ロシアのウクライナ侵攻、中東情勢など、世界が分断化するリスクも高まっています。このような時代だからこそ、私は人類の未来に貢献できる科学の力を信じ、真摯に真理を追究する研究者の活動を支えていくべきだと考えています。

高等研は、学問領域や専門分野のみならず、世代、組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進める方針(Beyond Boundaries)を、創設以来今日まで継承しています。そして高等研は、けいはんな学研都市地域という歴史や文化、人々の生活と先端研究が交差する環境の中にあります。このような特徴を生かした研究を行い地域社会に貢献するとともに、学術や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望

を持つ未来社会の実現に向けた研究活動を実施していきます。

2024年には高等研創設40周年を迎えます。2023年から始めた研究公募を継続し、将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた、根源的な問いに取り組む学際的な研究を進めます。2025年の大阪・関西万国博覧会に合わせ、けいはんな学研都市では、「未来社会への貢献～次世代への解～」をテーマに「けいはんな万博2025」の開催が計画されています。けいはんな学研都市の中核機関である高等研は、けいはんな万博と連携したシンポジウム・セミナーなどを開催することにより、国内外の人々が交流する機会を提供し、更なる成長・発展を目指してまいります。

公益財団法人
国際高等研究所

所 長 松 本 紘

理化学研究所名誉理事長
株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR) 会長



人類の未来と幸福のために、 何を研究すべきかを研究する

基本理念

国際高等研究所は、関西学術研究都市調査懇談会（通称「奥田懇※」）第3次提言（1982年）により構想提言された『世界の英知を集め、人類の未来の指針として揺るぎないものを構想、示そうとする』ものであり、その精神は今日まで脈々と受け継がれています。

それは国際高等研究所が、奥田東初代理事長が提唱された「人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する」ことを基本理念として掲げ、新たな学問の創造・進展を目指す「課題探索型の基礎研究」を行うことを目指す所以でもあります。学術研究を通じて、学問の新しい方向性を生み出し、新たな概念創出（学問の立ち上げ）により、学術界への貢献を通じて広く世界文化の発展に寄与することを目的とします。

※「奥田懇」

奥田 東 京都大学元総長を座長とする関西文化学術研究都市の構想を検討する有識者懇談会。1978年から1984年までの間に3次に亘り5回の提言を行った。

活動方針

人類社会は今、効率や発展を追求する時代から、「平和的・持続的共生」を基盤とする時代への転換点にあります。国際高等研究所の使命は、基本理念に基づき、平和を希求し持続可能社会の実現に向けて、人類の未来と幸福にとって不可欠で根源的な課題を探索・探究し、新たな視点と課題解決の方向性を世界に問いかけることです。

国際高等研究所は、「国や研究分野を越えた優秀な研究者が集い、自由な雰囲気の中で交流し、討論する場であること」を運営方針とし、創造的な基礎研究を推進します。

創設以来一貫して、以下の4項目を基本的な性格として研究活動の重要な柱としています。

- 国際的な研究機関であること
- 先進的な分野・課題を選んで基礎的な研究を行うこと
- 研究課題と研究者が固定しないようにすること
- 産業界と協力すること



設立の経緯

国際高等研究所は、その基本理念に賛同する産業界、学界、官界の強力な支援のもと、1984年8月に当時の文部省の認可を得て財団法人として創設されました。

1970年代後半以降、関西文化学術研究都市（けいはんな学研都市）構想の具体化が図られ、その過程において、先駆的事例（米国プリンストン高等研究所やドイツベルリン高等研究所等）を踏まえ、日本における独自の高等研究所のあり方が検討され、けいはんな学研都市の中核的学術研究機能を果たすべく設立に至りました。

1993年10月には、京都府から土地の提供を受け、けいはんな学研都市に開所しました。2013年3月には内閣府より公益財団法人認定書の交付を受け、同年4月1日付けにて公益財団法人へ移行しています。

2023年10月には開所30周年を迎え、2024年8月には、法人創設40周年を迎えます。



【寄付企業等】

京都財界、関西経済連合会、経済団体連合会、加盟企業を中心に

- | | | |
|---------------|--------|------|
| ●「財団設立時の支援企業」 | 京都財界 | 23社 |
| ●「40億円募金」 | 全国主要企業 | 151社 |
| ●「冠基金」他、大口寄付 | | 10件 |

けいはんな学研都市と国際高等研究所

けいはんな学研都市は、1978年の「奥田懇」第1次提言により提唱され、1987年の関西文化学術研究都市建設促進法の施行を経て、京都・大阪・奈良の3府県にまたがる京阪奈丘陵において、国家プロジェクトとして建設が進められているサイエンスシティであり、筑波研究学園都市と並ぶ日本の代表的な創造活動拠点です。

この京阪奈丘陵は、古来日本の都城であった飛鳥京、難波京、平城京、恭仁京、平安京に囲まれた中心に位置し、日本の歴史と文化にゆかりの深い土地柄です。けいはんな学研都市は、21世紀以降における我が国の新しい文化首都として、広く世界に開かれた都市を目指しています。

けいはんな学研都市には、現在約160の立地施設があり、大学や研究機関の集積を活かし、産学公民連携による多くの成果が生まれ、我が国の文化学術の進展に大きく貢献しています。

国際高等研究所は、このけいはんな学研都市の中核的研究機関としての位置付けを踏まえ、基本理念の実現を目指して、未来に開かれた研究活動を推進します。

● 歴代所長・理事長 ● 研究テーマ ● 事業履歴

1984

財団法人国際高等研究所設立許可（文部省）

1984

奥田 東 初代理事長就任

1993

けいはんな学研都市に本研究所開所

1994

岡本 道雄 第2代理事長就任

1995

社会情報学（吉田民人）

情報論的転回（吉田民人）

わざ学（山口 修）

1996

人類の自己家畜化現象と現代文明（尾本恵市）

生命体の多様性（岩槻邦男）

1998

新宮 康男 第3代理事長就任

1998

政府統治（government governance）の研究（本間正明）

環境と食料生産の調和に関する研究（渡部忠世）

生物研究と生命（中村桂子）

ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応（武部 啓）

情報市場における近未来の法モデル（北川善太郎）

2000

高度情報化社会の未来学（坂井利之）

種族維持と個体維持のあつれきと提携（岡田益吉）

多様性の起源と維持のメカニズム（吉田善章）

2001

公共部門における人材の配分と育成（猪木武徳）

東西の恋愛文化（青木生子）

災害観の文明論的考察（小堀鐸二）

思考の脳内メカニズムに関する総合的検討（波多野諠余夫）

物質科学とシステムデザイン（金森順次郎）

2003

開発途上国と日本人長期政策アドバイザー（橋本日出男）

分化全能性（原田 宏）

共同研究の法モデル（北川善太郎）

2004

立石 義雄 第4代理事長就任

2005

進歩主義の後継ぎはなにか（廣田榮治）

産学連携の知的財産法モデル（北川善太郎）

コア・エグゼクティブと幹部公務員制度の研究（村松岐夫）

多元的世界観の共存とその条件（石川文康）

電子系の新しい機能（新庄輝也）

学術研究機関における学術情報システムのモデル構築（北川善太郎）

2008

絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識（近藤寿人）

近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造（手島勲矢）

数量的アプローチによる日本経済の比較史的研究（宮本又郎）

ナノ物質量子相の科学（金森順次郎）

1978

関西学術研究都市調査懇談会（奥田懇）発足

1989

世界の高等研究所交流会議

国際公開フォーラム

「人類の未来に関する創造的研究をめざして」（東京・大阪）

1990

岡本 道雄 初代所長就任

1991

理論生命科学（岡田節人）

1993

安全科学（村上陽一郎）

1994

小田 稔 第2代所長就任

1994

比較幸福学（中川久定）

複雑系の秩序と構造（長谷川晃）

1996

沢田 敏男 第3代所長就任

1997

科学の文化的基底（伊東俊太郎）

言語の脳科学（乾 敏郎）

1999

器官形成に関わるゲノム情報の解読（松原謙一）

物質研究における多角的協力の構築（金森順次郎）

臨床哲学の可能性（野家啓一）

「一つの世界」の成立とその条件（中川久定）

2001

金森 順次郎 第4代所長就任

2002

国際比較からみた日本社会の自己決定と合意形成（田中成明）

スキルの科学（岩田一明）

センサー論（鷺田清一）

量子情報の数理（大矢雅則）

21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題（木下富雄）

2004

学習の生物学（星元 紀）

芸術と社会（佐々木正子）

隙間－自然・人間・社会の現象学－（鳥海光弘）

ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義（津田一郎）

2006

計算機マテリアルデザインコピーマートの構築（中西 寛）

19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究（吉田 忠）

スキルと組織（榎木哲夫）

認識と運動における主体性の数理脳科学（沢田康次）

グローバリゼーションと市民社会（仁科和彦）

生命科学の発展に対応した新しい社会規範の模索（位田隆一）

文化財保全技術（志水隆一）

2007

高度計測技術の発展と埋没（本河光博）

細胞履歴に基づく植物の形態形成（鎌田 博）

次世代情報サーチに関する総合的研究（田中克己）

女性研究者と科学技術の未来（伊藤厚子）

すきまの組織化（鳥海光弘）

スナマとシステム－知のあり方－（亀本 洋）

生物進化の持続性と転移（津田一郎）

2009

- 宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略（海部宣男）
 - 受容から創造性へ
- 近現代日本文学におけるスタンダードの場合－（ジュリー ブロック）
- 諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理学への展開（高橋陽一郎）
 - 天地人（尾池和夫）
- 21世紀における文化としての設計科学と生産科学（岩田一明）
- 法と倫理のコラボレーション－活気ある社会の規範形成－（服部高宏）
 - メタマテリアルの開発と応用（石原照也）

2011

- 『ケア』から見た社会保障の新たな展望（西村健一郎）
 - 心の起源（松沢哲郎）

2013

- クロマチン・デコーディング（石川冬木）
 - 分子基盤に基づく生体機能への揺らぎとダイナミックネットワークの解明（寺嶋正秀）

2014

- ネットワークの科学（郡宏・増田直紀）
- 精神発達障害から考察するdecisionmakingの分子的基盤（辻 省次）
 - 生命活動を生体高分子への修飾から俯瞰する（岩井一宏）
 - 設計哲学－俯瞰的価値理解に基づく、人工財の創出と活用による持続可能社会を目指して－（梅田 靖）
 - 総合コミュニケーション学（時田恵一郎）

2016～

- けいはんな“エジソンの会”発足
 - 理化学研究所及び京都府と基本協定を締結
- 奈良先端科学技術大学院大学及び理化学研究所との相互協力に関する包括協定を締結

2017

- 「日本文化創出を考える」研究会（西本清一）

2018

- 森 詳介 第5代理事長就任

2019

- 高等研将来構想検討会設置
- IIAS「哲学と先端科学」の対話シリーズ

2022～

- <「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト開始

2023～

- 上田 輝久 第6代理事長就任
- 学生の学生による学生のための教養講座開始

- 2023年度に実施の研究活動
- 終了した研究テーマ

2009

- 尾池 和夫 第5代所長就任

2010

- アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築（藤田治彦）
- 意識は分子生物学でどこまで解明できるか？（坂野 仁）
- 交渉学の可能性－新しい世界の関係構築と紛争の予防のために－（松岡 博）
- ジェンダーからみた家族の将来（姫岡とし子）
- 宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－（天野文雄）
- 単分子エレクトロニクスの現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築（夢田博一）

2012

- 老いを考える（松林公蔵）
- ゲノム工学とイメージングサイエンスに基づく生命システム研究の新展開（川上浩一）
- 東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」（天野文雄）

2013

- 公益財団法人へ移行（内閣府）
- 志村 令郎 第6代所長就任

2013～

- 国際高等研究所戦略会議（ISC）設置
- けいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”発足

2014

- 創設30周年記念フォーラム開催（大阪・仙台・東京・けいはんな）

2015

- 長尾 真 第7代所長就任

2015～

- IIAS塾ジュニアセミナー開始

2015

- 人工知能に関する問題発掘型対話基盤と新たな価値観の創出（江間有沙）
- 領域横断型の生命倫理プラットフォームの形成に向けて（児玉 聡）
- 21世紀地球社会における科学技術のあり方（有本建男）
- 人類生存の持続可能性－2100年価値軸の創造－（佐和隆光）
- 多様性世界の平和的共生の方策（位田隆一）
- 「けいはんな未来」懇談会（松本 紘）

2017

- 国際高等研究所シンポジウム開催（大阪・東京）
- 基幹プログラム（2015-2017）報告書を発刊
- 経営基盤委員会の設置と答申

2018～

- 松本 紘 第8代所長就任

2018

- SDGs時代における科学技術のあり方－ダバレスト宣言から20年－（有本建男）
- 第4次産業革命への適応
 - －社会経済システムの再編成－（佐和隆光）
- 教育を基軸とした住民参加型地域振興（高見 茂）
 - －けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成
 - －けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み
 - ～ヘルスリテラシー向上を通して～

2019～

- きづミーティング（集合知ネットワーク構築プロジェクト）（駒井章治）

2020

- 基幹プログラム（2018-2020）報告書を発刊

2021

- 変化の時代に“何を研究するかを研究する”方法の予備的探索
 - －学問知識のメタ分析とデザイナー－（有本建男）
- なぜ今「脱炭素」のうねりなのか（佐和隆光）
- けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み
 - －ヘルスリテラシー向上を通して－（第2期）（高見 茂）

2023～

- 科学技術の動向とロボティクスの将来－ロボティクスと家庭の関係－（小寺秀俊）
- 持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究（有本建男/宮野公樹）
- 人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究－関係性との関連を手がかりに－（高見 茂）
- グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究（新福洋子）

国や組織、分野を越え、 人類社会が直面する課題を考える

国際高等研究所は1984年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念とし、学問分野の境界を越え研究者が結集して、人類が直面する諸課題に関する学際的研究を進めています。

国際高等研究所（高等研）は、けいはんな学研都市地域という京都、大阪、奈良を見渡す地にあり、日本が培ってきた歴史、文化、芸術、技能、風土と先端研究が交差する環境の中にあります。人間や人々の生活を意識しながら、課題の発見から解決までを、学術研究に基づいて総合的に取り組むことができる位置にあります。

また高等研は、学問領域や専門分野のみならず、世代、

組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進める方針（Beyond Boundaries）を、創設以来今日まで継承しています。

このような特徴を生かした研究を行い地域社会に貢献するとともに、学術研究や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現につながる研究活動を進めています。



■ 自主研究

自主研究は、高等研の中核を成す研究です。研究代表者は高等研が主体的に人選し、高等研の一貫した特徴であるBeyond Boundariesの研究基盤を有する研究を実施していきます。2023年度は、以下の三つの自主研究を発足しました。

科学技術の動向とロボティクスの将来 ～ ロボティクスと家庭の関係 ～

研究代表者

小寺 秀俊 国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授

持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究

研究代表者

有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授
ISC（国際学術会議）フェロー

研究副代表・実行責任者

宮野 公樹 国際高等研究所客員研究員、京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 ～ 関係性との関連を手がかりに ～

研究代表者

高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、京都光華女子大学学長、京都大学名誉教授

■ 公募研究

公募研究は、研究方針と課題観を同じくする外部研究者が構想する研究です。対象とする研究は、高等研の「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」という基本理念に照らして相応しく、将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた、根源的な問いに取り組む学際的な研究としています。2023年度に研究公募を実施し、以下の研究を発足しています。

グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

研究代表者

新福 洋子 広島大学大学院医系科学研究科教授

研究代表者

小寺 秀俊

国際高等研究所副所長
京都大学名誉教授・特任教授
大阪大学特任教授



科学技術の動向と ロボティクスの将来

～ロボティクスと家庭の関係～

けいはんな学研都市がロボットおよびロボティクスの研究開発と事業化の拠点であることから、ロボットとロボティクスさらには、Human Augmentation（人間と技術の一体化による人間の能力の拡張）における研究開発現状を調査するとともに、今後の方向性を議論する。

ロボットおよびロボティクスに関しては、従来の研究、現在のロボティクス研究等の状況や今後の方向性をヒヤリングするとともに、人とロボットの関係やHuman Augmentation技術の今後の方向性を調査し、ロボットが人に関わる際の感性や倫理および技術に関する議論を行い、その議論の内容をまとめる。

尚、2025年度にシンポジウム開催予定である。

参加研究者

氏 名	所属・役職
小寺 秀俊 (研究代表者)	国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授 大阪大学特任教授
美濃 導彦 (顧問)	京都大学名誉教授、理化学研究所情報統合本部部長 ガーディアンロボットプロジェクトプロジェクト リーダー
中村 泰 (主査)	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト 動作学習研究チームチームリーダー
斉藤 康己	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト 高度研究支援専門職
古川 淳一郎	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト 人間機械協調研究チーム研究員
港 隆史	理化学研究所情報統合本部 ガーディアンロボットプロジェクト インタラクティブロボット研究チームチームリーダー

研究目的と方法

現在ロボットの研究は大きく分けて、3つに大別できる。

- (ア) 製造業における作業ロボット
- (イ) 災害時等に人が入ることが困難な環境において作業するロボット
- (ウ) 人を支援するための支援ロボット

ロボットの研究開発の歴史は古く、機械工学における機構と制御に関する研究から、多くのロボットシステムが工場等の作業現場で利用されるようになった。21世紀に入り、事前にプログラミングされた機能を発揮するだけでなく、搭載されたセンサーからの情報をもとに、動作を決定する知能化が進んできた。

現在、人とサイバー空間の間にはPC、Tabletさらにはsmart phoneという情報端末が存在する。現在のsmart phoneは、すでに搭載されたセンサーや接続されているセンサー機器からの計測情報をもとに利用者を補助する機能を実現していて、21世紀に始まったIoTの中核端末として機能している。また、AIおよび生成AIはネットワーク上に蓄積された多くの情報を元に推論し、新しい情報を生み出す能力を持っているように見える。

現在のロボット研究では、これらのAI、IoTを旧来の機械工学・制御工学と組み合わせ、多くの新たな役割を果たすことが期待されている。現在は、smart phoneやsmart watch等が人とサイバー空間の間のコミュニケーションの主な媒体であるが、近い将来、ロボットがその役割を果たす可能性がある。その場合、ロボットは企業等における作業現場で活躍するだけでなく、人の生活の場である家庭に入り、人と大きな関わりが生じることになると考えられる。

本研究プロジェクトは、家庭というサイバーフィジカル空間での存在感が大きくなりつつあるロボットと人の関係について、i) これまでの研究の調査、ii) 現在推進されているロボット研究の現状と課題の抽出、iii) 人とロボットの関係における人の感性や倫理に関して研究者へのヒヤリングや討論などを行い、今後の研究の課題をまとめることを目的とする。尚、JSTのCRDSやNEDOの戦略センター等の調査資料等をもとに技術動向についても調査を行う。

2023年度の具体的取組と実績

20年前（2003年）に、京阪奈のNICTにおいて、実際にモデルハウスを作りそこに家族が2週間生活することで、センサーネットワークとロボットが家庭に入った場合の人とロボットおよびセンサーネットワークとの関係を計測するという実験研究がなされていた。ミニシンポジウムを開催することで、その研究内容の調査および議論の機会を得た。国際高等研究所の有するメーリングリストで広く呼びかけ、開催当日24名の参加があった。特に近隣地区の研究機関から多くの参加を得た。3人の当時の研究者による研究内容等の発表と鼎談、市民や研究者との意見交換の場となった。

自主研究ミニ・シンポジウムシリーズ 開催報告 「家庭における人とロボットの共生を考える会」 第一回

(1) 開催内容

日時 2024年3月18日(月)15時～18時

場所 国際高等研究所

レクチャーホール、コミュニティホール

参加者 24名

テーマ：～17年前のユビキタスホームにおける対話ロボット 実証実験を振り返って～

家庭内ロボットの研究としては先駆的で、多くの興味深い知見を得た20年前の「ゆかりプロジェクト」の主要メンバー3名の先生がたをお招きして、昔話(鼎談)をして頂くイベントを企画した。

「ゆかりプロジェクト」は、ユビキタスホーム内のネットワークと子供をイメージした小型(身長25cm)の対話ロボットを接続し、日常生活で人を支援することを試みた実証実験であった。センサ群により自動化されたアンコンシャス型ロボットとしてのユビキタスホームと、その中で人間とのインタフェースを担うPhyno(フィノ)という対話型ロボットが使われ、4家族がそれぞれ2週間程度、実際にその家に住む、という大がかりな実験であった。(詳しくは、https://www.nict.go.jp/publication/shuppan/kihou-journal/kihou-vol53no03/06_03.pdf をご参照のこと)。

第一回では、

- 美濃導彦先生(理化学研究所情報統合本部基盤研究開発部門長・ガーディアンロボットプロジェクトプロジェクトリーダー)
 - 山崎達也先生(新潟大学教育研究院自然科学系情報電子工学系列教授・工学部教授、同大学自然科学研究科電気情報工学専攻情報工学教授)
 - 上田博唯先生(京都大学学術メディアセンター客員教授)
- の3名の先生がたにお集まりいただき、当時の苦労話や、当時は技術的制約のために不可能だったけれども今ならばできそうなことなどを自由にお話しいただいた。

当日のプログラムの内容：

Part1:(15時～16時)

- 登壇者3名による当時のスマートホーム実証実験の説明
- ・ゆかりプロジェクトの概要(美濃先生)(20分)
- ・家庭内情報環境のアーキテクチャ(山崎先生)(20分)
- ・家庭内サービスの構築(上田先生)(20分)

Part2:(16時10分～16時40分)

- 3先生による鼎談(30分)。
- 3名の先生方に実験当時のことを思い出しながら、自由にお話しいただいた。

Part3:(16時45分～17時)

- 質疑応答(15分)

Part4:(17時～18時頃まで)

- 参加者による意見交換会(1時間程度)



(2) 講演要旨

美濃導彦先生からは、ユビキタスホームにおける生活支援一ゆかりプロジェクトの概要と成果について、研究の背景、意義そして実際の研究の方法等に関して発表いただいた。計算機がさまざまな機器に組み込まれユビキタス環境が進化する中で、無線技術・アドホック技術などのネットワーク技術が進展してきた。その中で、オフィスや学校と異なり、分離されたプライバシー空間である家庭に閉じたサービスが可能であると考えた。家庭は、人間生活の基本の場である。そこに多機能で複雑なアプライアンスが多く入り、便利さを追求するあまり、無駄に同じ機能が複数ある弊害や機能があるのに実現できないなどの課題が見えてきた。そこで、家庭における機能協調基盤の構築と気の利いたサービスの実現をめざして、UKARI: Universal Knowledgeable Architecture for Real-Life appliancesが推進された(2003年5月～2006年3月)。このプロジェクトでは、家庭の情報化(ユニバーサルインタフェース、コンテキストウェアサービスの実現、ネットワークアプライアンスの機能連携サービス、機能協調基盤ミドルウェア、分散環境行動データベース等)の観点から、サービス評価・データ取得を行った。

山崎達也先生からは、家庭内情報環境のアーキテクチャ(分散型機能協調基盤ミドルウェア「ゆかりコア」)に関する発表があった。実際にどのような家を作り、そこにどのようなセンサーネットワーク環境とロボットを配置し、実験を行ったかなど具体的な内容に関する発表であった。

上田博唯先生からは、ホームユビキタス環境における生活実証実験から共生ロボットに対するコンパニオン・モデルの形成がどのように行われたかに関して、(a) ロボットに対する行動、(b) ロボットに対する感情、(c) ロボットの位置づけの観点から、実際にこの環境で生活された家族へのインタビュー結果をもとにした説明があった。さらに、日常生活を支援する住環境知能化の試みにより得られたいくつかの知見が披露された。それらは、「ユビキタスなセンサーにより構築された知的で柔軟な家と対話型ロボットを協調させる枠組みの有効性」、「生活実証実験における共通した生活者のポジティブな感想(対話型ロボットへの好意的な反応やカメラ等への意識がいつ消えるかなど)」、さらには「ロボットへの愛着のような感覚の発現」などで、実験の成果やそれに関する考察が話された。



今後の課題・期待される効果

2023年度においては、上記の通りUKARIプロジェクトに関して、当時の研究者3名から研究の内容とその成果に関して情報収集を行なった。特に、鼎談という形式をとることで、研究発表では話されない苦労や当時の思いを聞くことができたのは非常に有意義であった。

2024年度は、現在行われているロボットとIoTおよび人との関係に関する研究の状況と課題に関して、研究者からの講演と本プロジェクトメンバーとの議論を行い、その内容から、人とロボットの研究の今後に関して提案を行う。

その過程において、第二回のミニシンポジウムの開催および2025年度にシンポジウム(最終報告会)の開催の企画を検討する。



研究代表者

有本 建男

国際高等研究所
チーフリサーチフェロー
科学技術振興機構参与
政策研究大学院大学客員教授
ISC（国際学術会議）フェロー

研究副代表・実行責任者

宮野 公樹

国際高等研究所
客員研究員
京都大学学際融合教育研究
推進センター准教授

持続可能で レジリエントな 社会実現に向けた 学際共創の方法の 開発と実践研究

人類は生存の危機、学問・科学技術の危機に直面している。特に日本の分断状況は著しい。高等研発足の理念「何を研究するかを研究する」に立ち戻り、問の探求、解決の方法について多様なステークホルダーが、分野、組織、ジェンダー、世代、国の境界を越えてボトムアップで自由に議論し、新しい学問・科学・技術の方向を探索する場を共創的醸成・拡大。内外の個人・集団を結ぶネットワークを形成・維持・拡大していく。

参加研究者

氏 名	所属・役職
有本 建男 (研究代表)	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授 ISC（国際学術会議）フェロー
宮野 公樹 (研究副代表・ 実行責任者)	国際高等研究所客員研究員 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
上野 ふき	名古屋大学院情報学研究科社会情報学専攻情報哲学 研究員
呉 玲奈	株式会社ユニオン・エー 編集者
中山 俊秀	東京外国語大学副学長、同大アジア・アフリカ言語文化 研究所教授、同大学際研究共創センター長
矢代 真也	編集者、合同会社 SYYS 代表
渡辺 彩加	国際高等研究所特任研究員 京都大学学際融合教育研究推進センター技術補佐員 京都大学東南アジア地域研究研究所連携研究員

趣旨

1. 境界を越えた議論と探求の場の醸成

人類は生存の危機、学問・科学技術の危機に直面している。特に日本の学問、世代、組織などの分断状況は厳しい。高等研発足の理念「何を研究するかを研究する」に立ち戻

り、研究開発の問、社会の問の探求と立て方、解決の方法について、多様なステークホルダーが、分野、組織、ジェンダー、世代、国の境界を越えて、ボトムアップで自由に議論し、新しい学問・科学・技術・社会の方向を探索する場を共創的に醸成し拡大していく。さまざまな壁を越えて、内外の個人・集団を結ぶネットワークを形成・維持・拡大していく。

2. 全国9地区での対話集会

「全国キャラバン3Questions」の試み

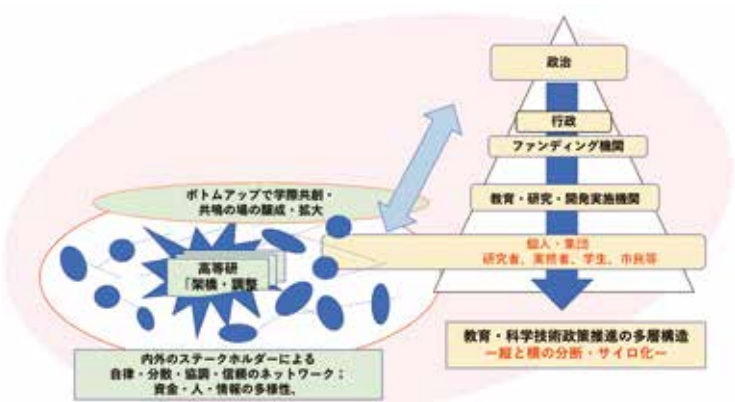
主として若手研究者を対象に、分野、組織、世代、大学の境界を越えて、自らのテーマの問い直し、新しい気付き、融合、創造を誘発する全国規模の学際共創プラットフォームの構築を目指す。各大学で活動する学際センター、URAなどを繋ぎ、今後2年間で全国を9地区に分け、各地区における幹事校を拠点に、その地区の研究者等100人規模の研究ポスター、対話集会を開催する。2年間は試行期間として9か所でキャラバンを実施し、その後、定常的仕組みに移行することを計画している。

3. 企画、運営、資金、人材など産学官の多様なステークホルダーの参画

多様な学術分野の人々が集まり、問の立て方や越境の工夫について、本音で対話できる仕組みと環境を醸成することで、自らの研究を深く問う場となることをねらう。共同研究の創出による研究テーマや内容の進展のみならず、研究者個々人の研究精神の深化にもつなげ、さらに同様な企てを進めている個人・集団を接続し、全国規模で展開することで、我が国の学術界の基盤と文化の醸成を目指す。

4. 今までの実績

第1回：2024年3月3日～6日、中国地区（広島大学）
＊過去の実績：京大大学際融合研究センター「100人論文プロジェクト」、高等研／国会図書館関西館「宿泊」プロジェクト



事業内容

（「全国キャラバン3 Questions」と称す）

全国キャラバン3 Questionsは、「問いの磨き合い」に特化した研究ポスター発表大会プロジェクトである。全国規模での実施を目指している。専門化、細分化がすすむ現在の学問研究において、「問いの磨き合い」という学問本来の営みを行い、学問の土壌を耕すことを目的としている。

プロジェクト名にある「3 Questions」は、参加研究者が「いま追いかけているテーマ／その展望／社会への問いかけ」の三つをさす。所属や役職による先入観を持たないよう「匿名」をルールとし、一枚のポスターの中に、研究者それぞれが「3 Questions」について表現展示を行う。市民は誰でも会場を訪れることができ、研究者が表現した3Qに対して自由に付箋コメントを貼ることが可能である。

全国キャラバンは、2023年度から2年間かけて、全国9地区で実施する予定である。その第1回が、2024年3月3日から6日に、中国地区の広島大学で行われた。2024年度は北海道・北信越・四国・東海の4地区で、2025年度は東北・九州沖縄・関西・関東の4地区での実施を計画している。高等研が主催、各地区の大学が共催となり実施する。全国キャラバンの趣旨に賛同してくださった10社以上の企業から寄附が集まっており、クラウドファンディングも実施している。

第1回は、高等研が主催し、中国地区の5大学、広島・岡山・島根・鳥取・山口大学が共催した。また、毎日新聞、日経新聞、中国新聞などの後援を得た。

第1回では、56枚の参加研究者によるポスター発表と、256名の市民参加があり、日曜の開催日には小学生や高校生、父兄の参加もあった。参加者からは、「美術館を訪れたようだ」「この研究者とちょっと踏み込んで話がしてみたい」などの付箋コメントが寄せられた。ポスター発表者からは「地域の方が私たちの研究に期待してくださっていることがわかり、勇気をもらった」、企業の参加者からは「学問の根が一緒だ」といった感想が寄せられた。

第1回中国地区開催の詳細

(1) 日程

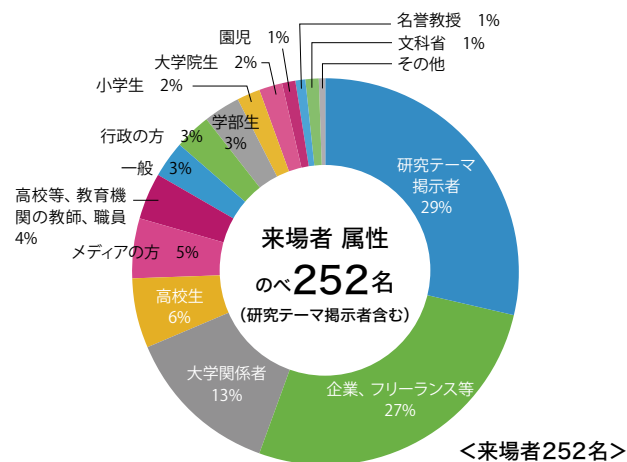
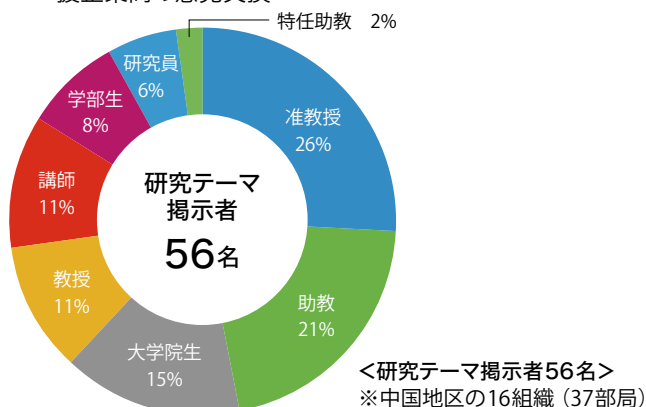
2024年3月3日（日）～6日（水）

(2) 場所

広島大学東千田キャンパス地域連携フロア SENDA LAB

(3) 内容

参加研究者56人ポスターの展示／来場者（252名）との対話／4テーマ「都市」「循環」「利己的行動」「創造性」に係るグループセッション／参加研究者・市民・支援企業間の意見交換



(4) 寄せられた感想

- ・日本中に志の高い学者はたくさんいる。彼らの学問に興味を持つ社会人もたくさんいると感じた（企業S）
- ・本当に様々な分野、年齢層の人々が参加していて、他にはない素晴らしい出会いの場であった。会場の雰囲気も素晴らしく、ここからさらに新しいアイデアへと創発していく可能性はある（研究者K）
- ・研究者だけでなく地域の方が私たちの研究に期待してくださっていることがわかり、勇気をもらうとともに頑張らなければと気合を入れ直しました。（研究者M）
- ・色々な立場の人からコメントがもらえたのはとても嬉しかったです（研究者O）
- ・どんな分野の学者も、何らかのテーマを与えられると、自らの接点を持ち得る。つまり、学問の根は一緒。それらの接点同士が繋がったり融合したりした時に、また、新しい発想が生まれる。（企業S）

(5) 研究テーマ例

- ・地球温暖化→地球沸騰化：生物が生きられる温度について真剣に考える
- ・文系博士の存在意義について
- ・相手の表情からわかること
- ・未だ謎多きアルツハイマー病：データ解析で挑戦
- ・“ぽつんと一町村”の元気な暮らしを支えるニッポンの技術
- ・日本の伝統的発酵食品の抗老化効果
- ・国籍や言語にかかわらずなく、誰もが等しく活躍できる、グローバルな大学像とは
- ・この世はどのような「価値」がどう「循環」していくのか？





研究代表者
高見 茂
国際高等研究所
チーフリサーチフェロー
京都光華女子大学学長
京都大学名誉教授

人を健康と幸せに導く 「意識」に関する研究

～関係性との関連を手がかりに～

けいはんな学研都市は、まちびらきから50年を経過し、この間本地域には研究機関や大学、文化施設が設置され、道路・公共交通機関等のインフラの整備も徐々に進み人口増加も見られた。また、これからの50年を見据えたりリニューアルの第一歩として、まちの玄関口である近鉄高の原駅前広場の再整備も計画されている。そしてハード面の充実に加えて、今後は人々の新たなネットワークの構築や幸福感の醸成、すなわち地域住民や勤務者のウェルビーイングの実現と向上というソフト面の充実も重要となろう。

本研究の目的は、「先端幸福創造都市けいはんな」実現の手立ての一つとして、人を健康と幸せに導く「意識」を明らかにし、けいはんな地区住民のウェルビーイングの向上を図ることである。

参加研究者

氏 名	所属・役職
高見 茂 (研究代表者)	国際高等研究所チーフリサーチフェロー 京都光華女子大学学長、京都大学名誉教授
秋山 知宏	神戸情報大学院大学情報技術研究科客員教授 京都光華女子大学研究職員 国際高等研究所特任研究員
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻健康解析学講座教授
木下 翔太郎	慶應義塾大学医学部 ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座特任助教
高松 邦彦	東京工業大学企画本部マネジメント教授
高見 佐知	京都大学教育学研究科研究員

性」の存在（良好な人間関係、何等かのつながりの感覚＝「意識」の在り方）が重要であるとの知見が得られている。また、予防医学等の観点からも、健康には「食事」「運動」の他に、「意識」が重要であるとされている。そこで、本研究では、健康と幸せを実現する「意識」をテーマに研究を推進した。特に、「奇跡的事例」に着目し、「困難な状態から著しく健康を回復した」事例群において、共通してみられる意識の傾向や要素の抽出を試みる事とした。

研究目的と方法

本研究は、2015年度から2017年度にかけて国際高等研究所で実施した『「けいはんな未来」懇談会』および『「けいはんな未来」専門検討部会』で提案された先端幸福創造都市の実現に向け、また具体的にけいはんな学研都市地域の振興を図る方策を調査検討することを目的として立ち上げられたものである。またそれは、本研究に先行して実施された「けいはんな地域のヘルスリテラシーの向上策の研究」の継続研究としても位置づくものである。

本研究では、人生100年時代を迎え健康で幸せに長生きするために、ウェルビーイングに対する人々のニーズが高まっていることに注目する。そして、健康と幸せの実現のために必要な要素を見出すことを究極の目的とし、先行研究の成果から、健康や幸せを実現している人々に共通する要素として、「関係



2023年度の具体的取組と実績

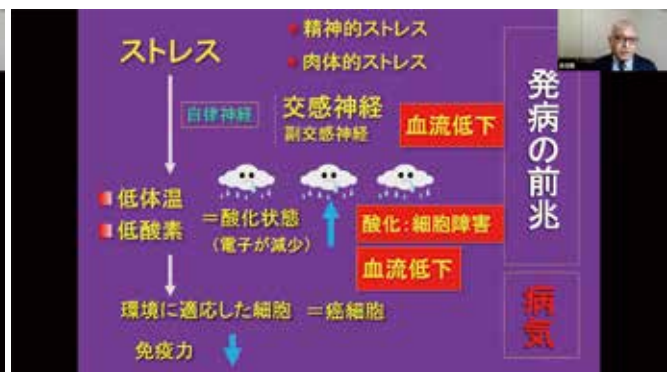
2023年度は国内、国外の文献収集に努め、先ず「人を健康に導く意識」に関する研究の海外事例として、Kelly Turner博士によるRadical Remission Projectに着眼した。Turner博士は、ガンが劇的に完解した1000本以上の医学論文を分析し、50名以上の代替医療者ならびに20名の患者へ治療過程についてインタビューを実施していた。そこでは、「劇的な寛解」に重要な役割を果たしたと推測される要素75項目を確認し、余命宣告から「劇的な寛解」に至った人たちに共通して実行していた9つの要素を抽出していた。それは、①抜本的に食事を変える、②治療は自分で決める、③直観に従う、④ハーブとサプリメントの力を借りる、⑤抑圧された感情を解き放つ、⑥より前向きに生きる、⑦周囲の人の支えを受け入れる、⑧自分の魂と深くつながる、⑨どうしても生きたい理由を持つ、ことである。このうち①と④は肉体的な事柄との関わりを持つものであり、それ以外の7項目は全て心の在り方、すなわち「意識」に関わる項目であり、その重要性のエビデンスであると指摘できる。

また、ガン治療で成果を上げておられる専門医である「ハズしまぶくろクリニック」院長島袋隆先生からレクチャーを頂き意見交換の機会を持った。同クリニックのコンセプトには、①自らが主体的に取り組める医療、②自己治癒力を最大限に引き出し、常に期待感を持ち続けられる医療、③ワクワクする医療を掲げておられ、手術治療に加えて温熱療法、免疫療法、電子療法などを導入して、患者さんの力を最大限に引き出すことを目指しておられるとのことであった。海外からも通訳付きで来日し受診される方々も多いとの事であった。この意見交換会は、島袋先生の日々のご研究と実践から多くの示唆を得る事をねらいとした。

島袋先生は、「医者の方考え方としては、健康に病気がひつつから、病気の部分をはがそうとする。外科においては、病気の

部分だけでなく、健康の部分も少し削ってしまおうとする。しかし、ガン死亡者数が1981年から2021年まで増えている。これに対して、私は、病気の原因、発病の前兆を切る必要があると考えている。発病の前兆とは、ガン患者とその家族に話を聞くと全員が精神的ストレス(人間関係、恐れ、ネガティブな感情)と肉体的ストレス(働き過ぎ、嗜好品の偏り過ぎなど)がかかり、活性酸素が増えると不健全な血液となる。その結果、自律神経が乱れ血流が低下する。その川下に、ガンが存在する。ガンだけでなく、糖尿病、リュウマチ、高血圧、腰痛、肝炎、不整脈も身体が活性酸素によって酸化するプロセスを通る」との考えを披歴された。そして「ストレスが多くて酸化して身体が冷えていると、ガン細胞が死ねなくなることに気が付いた。医者になって2年間ガンは敵だと考えていたが、多くの患者を診てきた結果、平成10年頃からガンは敵ではないと考えるようになった。主人公は、医者ではなく患者であることに気が付いた」と持論を展開された。さらに「手術、抗がん剤、放射線も頓服薬(鎮痛剤)を飲むことも否定すべきものではなく、それぞれにメリットがあるが体質改善(食事、運動、意識)が非常に重要である。細胞が働くには、〈心の持ち方〉や〈意識〉が左右する」と指摘された。島袋先生との意見交換からも、Kelly Turner博士の主張する患者の「意識」の有り様の重要性が確認されたと言えよう。

研究会参加者からは、「お話の内容は、実にその通りだと思った。メカニズムのフローの一つひとつは間接的に解明できているか、解明できるだろうと直感した」、「医学教育において医師あるいは医療者が今日のお話のようなことを理解して、患者にどう接するか、免疫や気持ちを強くもって頂くかという点をもっとやるべきである」、「免疫の活性が上がるのが一番のポイントならば、普段からストレスを感じないかストレスを感じてもうまく転換できるようなIQのようなものを考えられるのではないか」、「科学と〈哲学・宗教・思想〉の融合という方向性には深く賛同する」といったコメントが寄せられた。



今後の課題・期待される効果

Radical Remission Projectでは無料公開のデータベースも用意されており、今後内容の確認も行う予定である。また、コクランレビューを用いた文献検索とWeb of ScienceやPubMedなどのデータベースを用いた文献検索も進める予定である。その際、検索のキーワードやフレーズの選択が極めて重要であると考えられるので、慎重に取り組む所存である。mindfulnessやwell-being等も本研究関連キーワードであることから、文献検索の際に用いる予定である。さらに、社会的処方 (Social prescribing) と健康に関わる意識の関係についての研究を計画している研究参加者もあり、その研究成果が期待される。加えて過去の研究において、学校で健康の維持増進の必要性に関する教育を実施した場合、教育効果があるとのエビデンスが確認されている。それゆえ学校教育において健康の維持増進「意識」をどう獲得させるのかという点にも注目したい。



研究代表者
新福 洋子
広島大学大学院
医系科学研究科教授

(撮影：サイエンスポータル)

グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと科学者の役割を検討し、未来に続く若手世代がそうした議論に参加し、国際的な活動のスキルを向上するために、分野横断的な若手～中堅の研究者のネットワークを形成する。分配的正義に関する最近の動向を、文献、国際会議の参加者からの聞き取りによる調査や国際会議に合わせてイベントを組み、議論を展開する。それらの議論の結果を積み上げ、論文として発表する。

参加研究者

氏 名	所属・役職
新福 洋子 (研究代表者)	広島大学大学院医系科学研究科教授
隠岐 さや香	東京大学大学院教育学研究科教授
狩野 光伸	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授
近藤 康久	総合地球環境学研究所研究教育部教授
坂元 晴香	東京女子医科大学医学部准教授
標葉 隆馬	大阪大学社会技術共創研究センター准教授

研究目的と方法

人類は現在、気候変動や感染症、紛争といった世界規模の惨事を抱えている。グローバルには、その影響を直接的に受ける人、間接的に受ける人、影響を受けにくい人がある。感染症を例にとると、ワクチンの世界的な分配の不平等は、健康格差に加え、渡航の可否にも渡り、機会の損失という不平等を生み出した。しかし感染症は一部でも残ればそこから変異する可能性も残され、残りの人類にも不幸な未来を生み出しかねない。人類の未来と幸福のためには、科学技術から得られる恩恵を、グローバルに公正に分配する仕組みが必要である。本プロジェクトの目的は、分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと、その達成に向けて科学者はどのような役割を担うかを検討することである。

研究方法

1. チームビルディング：参加メンバーによるオンライン会合によって、テーマに関し感じている課題を共有し、以後の研究活動について合意を得る。
2. 文献調査：分配的正義、科学ディアスポラ、科学技術外

交、特に現存する国際団体の役割に関する最近の動向を文献や国際団体の委員からの聞き取りによって調査する。

3. 国際会議での議論：参加メンバーとの議論によって抄録をまとめ、国際会議にアジェンダを提出する（GYA総会・学会、WSF等を想定）。

4. 論文執筆：参加メンバーで議論した内容をまとめ、論文化する。

2023年度の具体的取組と実績

2023年11月14日 第1回会議

研究の目的と概要、今後の活動についてディスカッションを行った。

文献検討について、Distributive justice, Social justiceなどが、サイエンスの科学政策、ガイドライン周りで見られるようになっており、どういうものが価値観として提案されているのかは整理した方がよい。そのような観点について国際的で議論が行われている中、日本が議論に入れていないのは厳しい。Justiceを用いた表現（environmental justiceなど）は多数存在する。日本が議論に入るために、どういうものが世界でそもそも議論されているか？を調べる必要がある。そうすると必然的に科学をめぐる格差の話に習熟できる。それがWHO健康格差の話とも直結し、さらに気候やサステナブル、環境負荷の話とも直結し、正義という言葉の中で数珠繋ぎになっている。その部分の構造を私たちが説明できるようにならないといけない。そういう議論のまとめのようなものについて、国内で政策関係者が読めるものがない。こちらでそれを書くことが、政策側への打ち込みやコラボの仕方としてはやりやすいのではないかな。

コロナの蔓延後より、ワクチンの公平なアクセスに関して議論が続いている。今まで、ラストワンマイルの人にどのようにワクチンを届けるか？という議論をしてきた。コミュニティになんとしても届けようとしていた。しかし、それについて環境負荷を

かけないで出来るか?という議論も出て、環境セクターとヘルスセクターと対立気味になっており解がない。あらゆる制約があるなかで、どう公平性を達成するかは誰も答えを持ち合わせていない。

気候変動関連の専門家のチームに入ってもらう方が良いとの提案から、鹿嶋小緒里氏(広島大学、プラネタリーヘルス専門)にヒアリングを行うことになった。

2023年12月5日 第2回会議(鹿嶋小緒里氏ヒアリング)

鹿嶋小緒里氏よりプラネタリーヘルスについて、その概念、The planetary boundaries、Climate justice、広島プラネタリーヘルス宣言2023、「プラネタリーヘルシーエイジング指標(PHA Index: PHAI)」の開発について情報提供をいただき、メンバーとディスカッションを行った。

特に質疑の中心になったPHAの開発に関して、鹿嶋氏は健康、自然生態系システム、ソーシャルシステムに関してどのような指標を集めるかということに取り組んでいる。既存の指標を組み合わせるだけでなく、地域に即した地域の指標を集めることも必要である。測定に関して、どちらかというとポジティブ思考のものを測定したいと考えているが、それだけでは足りないものも測定しないといけいない。それをソーシャルバウンダリーという形で入れていて、明らかに不足しているところは頑張っ取り組んでいきたいと思いますという形で共有していければと考えている。

PHAに関して、ソーシャルバウンダリーを決めてそれに足りないものがあつた時に、このプロジェクトではどこに働きかけて改善を行っていく予定か、が問われ、足りない部分に関しては行政の仕組みも重要になってくるので、行政にまずはアプローチをしていきたいとあつた。何で足りないのかは科学者で突き止められる。それに対して、どうしたいのか?という部分は、住民の方がどういった街づくりをしたいかということと関係してくる。様々なセクターの方との共創の場にこのツールを使ってもらえたらよいのではないかという議論から、住民や行政との共想の重要性が浮かび上がった。

2024年3月 第3回会議(神原咲子氏ヒアリング)

メンバーから提案のあつた神原咲子氏からヒアリングを行った。

神原氏も科学研究が現実の社会で十分に活用されていないことへの問題意識があり、この問題に対応するためには、科学の成果の分配について考える際、科学の普及だけでなく市民自身が科学活動に参加することの重要性を認識する必要がある。研究者が単に市民になるのではなく、市民自らが積極的に科学研究に参画し、研究者と市民が共同で研究チームを形成することが理想的である。しかし、市民が科学に参加する際には、モチベーションの欠如や必要な知識の不足などの問題や、研究者と同等の活動を行うことは現実的ではない場合もある。これらの課題に対処するための仕組みを構築することが必要である。また、合意形成の方法が変化してきたことで、研究のあり方や倫理の取り扱いも変わりつつある。科学倫理の観点からも、各分野での倫理観の差異が社会に影響を及ぼす際の変化を考慮する必要がある。

神原氏の災害看護における経験から、災害に関する研究のニーズとファンディングのギャップなどが議論された。短期・中期・長期といった時間軸で見た際、調査災害は初期に来て後でいなくなるとかあるが、今まさに起きている語り、長期の復興の中で見えてくる話に関わる研究者が限られていたり、ファンディング側からは、旬が過ぎたと思われがちで研究費が出ない、短・中・長期の時間スケールで見えていかないとはいけない。また、空間に関しては、国家間の差、地域の中でも支援に来てくれる・来てくれない所など空間スケールで全然違った層が見えてくるところがある。そして、そこにマイノリティー差別など、アクターの属性による格差のようなものがあり、少なくともこの3軸(時間軸、空間軸、社会的属性)で研究者が入る入らないといった話も考えないと、実像の重なりあっているところは多くあるが、その解像度がよく見えてこない話が多いんだなと改めて感じながら話を聞いていた。このプロジェクトでも、何かの事例を通して、この3軸で整理してみるだけで、見え方が全然変わってくるのではないかな。

文献検討と論文執筆

Distributive Justice, Health Justice, Environmental Justiceについて先行研究のレビューを行い、AAASからのコールに合わせて1000文字の抄録を執筆した。不採択も、ISCよりHigh-level Political Forum(HLPF)のポジションペーパーの事例を提出するコールがあり、一部を提供したところ、ポジションペーパーに入ることとなった。

今後の課題・期待される効果

- ・3回目の会議で提案された、事例の時間軸、空間軸、社会的属性での検討を行い、分配的正義を実践するための枠組みについて理解を深める。事例は国際的な大きな事象と、ローカルな事象とを考えてみたい。
- ・2024年11月世界災害看護学会での企画セッションへの登壇を計画している。その他にも国際的な大きなイベントがあつた際に、対応する。その際には研究メンバーに限らず広く若手研究者を巻き込むようにする。
- ・文献検討から書き始めているペーパーを書き上げ、国際ジャーナルに提出する。すでにパナマとナミビアの研究者に共著に入ってもらっており、内容によっては更なる協力者を募る。

組織、分野、世代を越えて 語り合い、学ぶ。

2013年度より、国際高等研究所の活動に関わる大切な知的資源を社会に発信・還元し、講師や参加者の気付きと学びにつながる出会いの場となる、様々な交流事業を行っています。参加者の所属や専門分野、地域、世代の境界を越えた交流の場です。



けいはんな「エジソンの会」

最先端技術の第一人者を国立研究機関、大学、企業などから招聘し、質の高い講演を拝聴します。その後、参加者と講師陣が相互対話するインタラクティブセッションに十分な時間を割いて開催するセミナーです。最先端の科学技術の学びを介して、けいはんな学研都市の研究者や市民の方々が知的交流する場を提供しています。

けいはんな「エジソンの会」は、2016年に発足。社会のニーズに焦点を充て、社会実装を伴う数々の発明で社会貢献した「トーマス・エジソン」の偉業に倣い、「エジソンの会」と命名しました。

2023年度は、前年度に引き続き、これまでに展開してきた科学技術シーズ起点のテーマ設定に加えて、サイエンスの進歩とそれによるテクノロジーの発展、そこから見出される科学・技術・社会の相互作用の重要性を踏まえ、特に我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野や技術に焦点を当て、未来に向けて取り組むべき研究対象、技術開発対象は何かを考察する機会としました。

コロナ禍の影響が緩和し、今年度は4回の開催となり、けいはんな学研都市の立地機関をはじめ、全国から延べ106機関199名の方々にご参加頂きました。



2023年度開催実績

ビッグデータの活用による社会課題の解決に向けて

第42回会合
2023.4.26

笹原 和俊

東京工業大学 環境・社会理工学院 准教授

「ビッグデータから社会を予測する
～計算社会科学からのアプローチ～」

江崎 貴裕

東京大学 先端科学技術研究センター 特任講師
株式会社infonerv 取締役

「データ/アルゴリズムと社会のインターフェースを考える」

両講師よりビッグデータをもとに、ある時は単純、ある時は非常に複雑な人間の行動を深く理解し、モデル化とシミュレーションを通して「未来予測」と「社会課題の解決」を図る取組みを解説頂きました。講師のお二人から新たな領域に果敢に挑む挑戦者としての強い意気込みを感じ、会場と講演者の思いがひとつになった会合となりました。

サイバーフィジカルシステム(CPS)の衝撃

第43回会合
2023.8.31

喜連川 優

大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構
機構長/東京大学 特別教授

「巨大データが創るデジタルの新潮流 ～LLM(ChatGPT) / ARW(ロボットによる発見支援) / デジタルツイン～」

辛島 正俊

武田薬品工業株式会社 ファーマシューティカルサイエンス
サステナビリティ&テクノロジー イノベーション ヘッド

「世界に尽くせ ～革新的な医薬品の創製と開発を通して～」

喜連川氏からは、方程式がない殆どの事象に対し、膨大なデータ自身がドライビングフォースとなり、デジタルの新潮流が進んでいること、また、科学技術の進歩を促進するための「オープンサイエンス」への取組みについてもご説明を頂きました。辛島氏からは、医薬品創製の全工程を通じた最新技術の活用について業界リーダーとしての取組みの数々を説明頂きました。インタラクティブセッションでは、今後ますます進化するAIと人との役割の再定義や、イノベーションと現在の教育制度の在り方、日本の医療制度の問題点にも話しが及び、日本製のコロナワクチン開発の出遅れた経緯など、多様な側面から活発な意見交換がなされました。

創造力とは何か ～未来への新たな扉を開く生成AIの衝撃～

第44回会合
2024.1.11

岡崎 直観

東京工業大学 情報理工学院 教授

「生成AIは創造の扉を開くのか
～大規模言語モデルが産み出す新しい未来～」

倉田 岳人

日本アイ・ピー・エム株式会社 東京基礎研究所 技術理事

「ビジネスのためのAI活用を加速するwatsonx」

岡崎氏より生成AIの最新動向と今後の展望や産総研と手掛ける日本語大規模言語モデル（通称Swallow）の研究内容について、また倉田氏よりAIの変遷とこれまでの企業の取組み、生成AIの基盤モデルの活用事例についてご説明頂きました。海外でのAIに関わる投資と日本の実情を踏まえ、日本の周回遅れの現状をいかに打破していくのか、またブラックボックス化されたAIをこのまま評価して問題はないのか、生成AIは論理思考ができるのか、などAIの進化に関わる本質的な疑問や問題点が議論されました。大規模言語のプラットフォームモデルは今後標準化が進み、個々の環境や要因を差別化要素としてビジネスが展開されていくと思われます。国や巨大IT企業の膨大な投資に支えられ、日々進化を遂げるAI領域ですが、我が国に適した生成AIが更なる活用を促し、人とAIとの共創を呼ぶ豊かな社会を目指したいと思いました。

ディープフェイクの衝撃 ～現実と仮想の狭間で～

第45回会合
2024.3.7

越前 巧

国立情報学研究所 情報社会相関研究系 研究主幹・教授
シンセティックメディア国際研究センター センター長

「インフォデミック時代におけるフェイクメディア克服の最前線 ～JST CREST FakaMediaでの取り組み～」

山岸 順一

国立情報学研究所コンテンツ科学研究系 教授
シンセティックメディア国際研究センター 副センター長

「音声のディープフェイク検知はどこまで可能か？」

越前氏より、画像や動画を数々の事例を具体的に示しながら、フェイクの生成技術の最新状況と研究成果を、また、山岸氏からは、音声を中心とした生成技術の特長と具体的に様々なフェイク検知の成果や新たな発想での今後のアプローチ手法についてご説明頂きました。当プロジェクトの成果として一般公開されている学習用データベースが、多くの機関・企業および海外からも高く評価され、活用されていることを知りました。生成AIの進化と相まって、デジタル空間での真偽の判断がますます難しくなる時代においては、技術オリエンテッドではなく、社会における「トラスト（信頼）」の意味を改めて考え直し、その問題を社会システムとして捉え、十分な議論を尽くすことが必要であると痛感しました。

2024年度は、2023年度に引き続き、我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野や技術に焦点を当て、未来に向けて取り組むべき研究対象、技術開発対象は何かを考察する場を提供していきます。

当会合は、理化学研究所および関西文化学術研究都市推進機構より後援を頂いております。

また、講演に際しては、理化学研究所AIP副センター長の上田修功氏に、インタラクティブセッションにご登壇頂いております。



満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

〈「新たな文明」の萌芽、探求を!〉プロジェクト

「近代文明」は、科学・技術文明として隆盛を極める一方で、地球環境システムの不全や、人類の分断と抗争も生み出してきました。それに立ち向かうためには、新たな自然観の獲得とともに、歴史、文化、宗教などを核とする「新たな文明」が肝要となります。2022年度から、年度ごとに一つのテーマを設定し、人類的遺産の形成に貢献した人物などをけいはんな「ゲーテの会」（以下「ゲーテの会」）での講演テーマに取り上げ、「meta鼎談（哲学×科学×技術）」及び「市民懇談(round table)」につなげて、広く市民の参加を得ながら実践的議論を深め、けいはんな学研都市ならではの取組を行っています。

■開催概要

2023年度テーマ：「文明論」、モチーフ：『「日本文明」の固有性と普遍性—「近代文明」の限界を超えて—』

日本は、中国文明とアメリカ文明との狭間にあって、そのアイデンティティをどのように確立していくかが問われています。日本文明の在り方を追求していくことは、これからの世界にとっても不可避のテーマであり、次代を拓く「新たな世界観」を獲得する端緒が開かれることを願い、以下4つを開催しました。各会合では文明論に関する多岐の分野について、広範囲の意見交換が繰り広げられ、日本社会の再構築、平和への道筋、日本の国際貢献などについても話が及びました。なお2024年度は「生命論」を取り上げる予定です。

満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

2013年8月以来、「近代合理主義」の光と影を追い、新たな文明の萌芽を探求しています。

分野	講演者	テーマ
思想・文学	瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授	岩倉使節団150年を機に「日本文明」の再興を考える—受容する文明から需要ある文明へ—



【第92回開催概要】 2023年5月12日（金）18：00～20：00

<参加者数> 75名（会場22名、オンライン53名）

<講演要旨> 日本は、世界に類例を見ないほど、ものの見事に近代国家（中央集権国家）へと脱皮した成功体験が、今や、日本の発展のネックとなっているのではないかと、今、第二の「岩倉使節団」を派遣するなら、国際社会が求めているニーズ、日本が貢献できるシーズ、現代の日本のあるべき姿の探究が必要であり、日本の進むべき道として「受容する文明から需要ある文明」を提言されました。

けいはんなmeta鼎談（哲学×科学×技術）

異分野の学識者3名が、哲学・科学・技術の切り口でテーマを深掘し、次代を拓く端緒を探ります。

分野	講演者	モチーフ
宗教哲学 国際政治学 自然人類学	末木 文美士 国際日本文化研究センター名誉教授 三牧 聖子 同志社大学准教授 斎藤 成也 国立遺伝学研究所特任教授	「日本文明」の固有性と普遍性—「近代文明」の限界を超えて—

【第2回開催概要】 2023年6月17日（土）14：00～17：00

<参加者数> 63名（会場26名、オンライン37名）

<鼎談要旨> 冒頭に三講師から専門分野における日本についての分析が披露されました。斎藤先生は、DNA分析による日本列島人の系統と朝鮮半島の人たちの近縁関係、ヤマト人に存在する二重構造の解説。三牧先生から、国際政治における欧米とグローバルサウスの対立軸の中での日本、核抑止論と核廃絶論の対立軸の中での被爆国日本、そのアイデンティティの確立の重要性についての解説。末木先生からは、王権と神仏、武士と朝廷の二重構造で保持されてきた伝統的な日本社会が、明治以降に、精神世界の軽視や文化装置の不全により国家の機軸が失われ、日本社会の再構築が待望されているとの発言がありました。鼎談では、生物進化と人類の平和的共存との関係、国家を超えた平和的関係構築の糸口の探求などに関して意見が弾みしました。



本活動は、令和5年度けいはんな学研都市・文化力強化推進事業（京都府）の助成を受け実施しています。

けいはんな市民懇談(round table)

市民や専門家など様々な人々が意見交換し、学びあい、新たな文明の萌芽につなげます。

役割	登壇者	モチーフ
モデレーター メンター	本田 隆行 科学コミュニケーター 末木 文美士 国際日本文化研究センター名誉教授	「日本文明」の固有性と普遍性 ー「近代文明」の限界を超えてー



【第2回開催概要】 2023年7月15日(土) 14:00~17:00

<参加者数> 50名(会場13名、オンライン37名)

<懇談要旨> 参加者からKJ法的手法で関心事を募り、3つのセッションを設けました。①「科学・技術」では、日本は事物の固有性、日常生活への有用性を、反して西欧は事物の普遍的法則性を、それぞれ探究する傾向。②「文化・宗教」のセッションでは、国家・社会の統治の形として、西欧は、神を社会の最上部に据え、反して日本では神仏は伝統的に社会の基底部に置かれ、礼節を尊ぶ「和」の精神を養ってきたが、明治維新を機に欧化思想の下で壊され、その弊害は顕著で「日本文化」・「日本文明」の再興の論点となること。③「戦争・平和」のセッションでは、ユネスコ憲章序文の理念「人の心の中に平和の砦を」が平和の礎となること、支配・服従を超えた「包摂の思想」等に話が及びました。「新たな文明」の萌芽が胚胎する兆しを感じながらの様々な議論が展開されました。

満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

分野	講演者	テーマ
科学・技術	長谷川 真理子 日本芸術文化振興会理事長	人類の進化から見たヒトの文明と「人新世」



【第93回開催概要】 2024年1月23日(火) 18:00~20:00

2023年度テーマ「文明論」の総括として開催

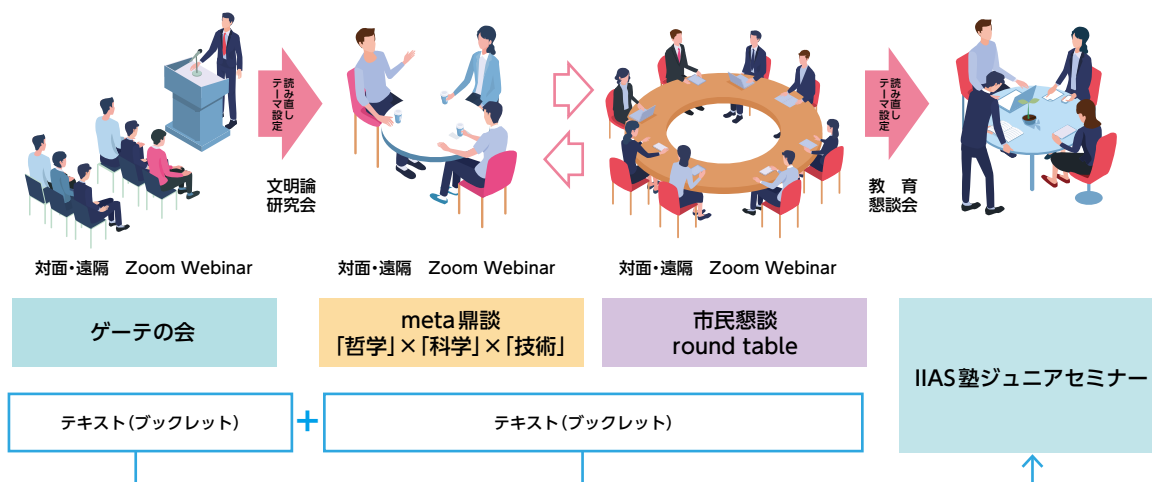
<参加者数> 77名(会場23名、オンライン54名)

<講演要旨> アフリカなどでのフィールドワークの過程で、人間そのものに関心が向き、人類とその文化の相互進化と変容、その機序について研究を重ね、「ヒト」の本質的傾向を探究してきたという、ご自身の経歴の紹介から始まりました。人類は集団行動での協力と競争、共同繁殖などを通じて、特徴的な「大きな脳」を獲得し、狩猟採集社会、農業社会への変化に適応してきました。「産業革命」を機に人口の激増、経済の急拡大、地球環境の激変により、1950年頃を境とする「人新世」の始まり、さらに情報社会が人類の脳機能に変化をもたらし、人の本性も変化した「新・人類」の誕生について紹介されました。これからの「人新世」を生きる「新・人類」は、如何なる文明世界を構築していくかに想いを馳せる講演でした。

〈「新たな文明」の萌芽、探求を!〉プロジェクト

趣旨

近代合理主義を超えて、その自然観、人間観、死生観を問い直す。
近代化の光と影を追ひ、未来を照射する。



市民参画／学学連携／産学連携／教学連携

(「ゲーテの会」参加者、講師、大学院生、高校教師、「IIAS塾ジュニアセミナー」受講生、企業研究者 など関係者)

満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

IAS塾ジュニアセミナー 「独立自尊の志」養成プログラム

『IAS塾ジュニアセミナー「独立自尊の志」養成プログラム』（「IAS塾ジュニアセミナー」）は、18歳前後の高校生・大学生を対象として行われるリベラルアーツを旨とする教育・学習プログラムであり、受講生のリベラルアーツ学修への興味と関心の涵養とともに、自学・自習への契機の提供を目的としています。

《IAS塾ジュニアセミナーの三つの特色》

① リベラルアーツを旨とする全人教育の場

テキストを中心とした言語表現を旨とする討論を主体としつつも、身体を使った体験学習もプログラムに取り入れ、本セミナーならではの「全人教育」を試みています。

② 先達との協働で学びの楽しさを体感する場

第一級の学者の協力を得て学びの本質、意義について教示を受け、また大学院生を中心として構成されるTA（ティーチングアシスタント）の支援のもとにグループ討議を行い、自由にテーマを設定し、議論を深めます。ここは、講師、TA、受講生が対等の立場で意見を述べ、それを相互に受け止める場でもあります。

③ 学校の枠を超えた若者の知的交流の場

地域・学校・分野を超えた、自由な雰囲気の中で議論を交わすことのできる場であると同時に、人生観、学問観に影響を与える知的刺激に満ちた場となっており、通常の学校生活では得られない交流の場を提供しています。

本セミナーは2016年春季以来、毎年、春季（3月）と夏季（8月）の年2回、国際高等研究所（高等研）の宿泊棟を活用し、2泊3日の日程で対面方式により開催してきましたが、コロナ禍を考慮し、2020年春季と夏季は中止、2021年春季からはオンライン方式を取り入れて開催。2023年夏季からは本来の対面・合宿方式で開催し、寝食を共にして学ぶ機会としています。2024年春季までに延べ15回実施し、全国の62校から343名が参加されています。

プログラムの内容は、『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録をブックレット化してメインテキストとし、「思想・文学」「政治・経済」「科学・技術」の各分野に係るテーマを取り上げています。その企画運営は、国際高等研究所の特任研究員の方々（金澤洋隆、真鍋公希、山根直子）にご尽力いただいています。

なおセミナーの2021年度～2023年度は、一般財団法人 三菱みらい育成財団の助成を受け実施しています。

2023年夏季

8月2日（水）～
8月4日（金）

課題探究型

基本テーマ：

『生命観・死生観を考える』
～科学技術の発展の下での
人間の在り方を問う～＊対面・合宿方式で
開催

1) 思想・文学分野

テーマ：「生命とは何か。
自然観・生命観、彼我の違いと変遷」
講 師：鈴木 晶子
京都大学名誉教授

2) 科学・技術分野

テーマ：「感染症に向き合った日本人、
偉大な先人、二人の軌跡」
（その1）天然痘に挑んだ緒方洪庵
講 師：木下 タロウ
大阪大学特任教授
（その2）「病を未発に防ぐ」予防医学を
目指した北里柴三郎
講 師：森 孝之
北里柴三郎記念室臨時職員

3) 体験学習（心身の学）

テーマ：武道を通じて体得する
「もう一つの知、身体知」
—生命活動における客観知と
主観知に触れて—
講 師：藤原 広臨
京都大学大学院医学研究科講師

1) 思想・哲学分野

テーマ：「本居宣長」に学ぶ
～「もののあはれを知る」と「漢意」、
その多様性と先駆性～
講 師：田中 康二 皇學館大学文学部教授

2) 政治・経済分野

テーマ：「大河内正敏」に学ぶ
～「科学主義工業」こそ、産学連携
「理研モデル」の核心～
講 師：齋藤 憲 専修大学名誉教授

3) 科学・技術分野

テーマ：「梅棹忠夫」に学ぶ
～「文明論」的視点を持って物事を
考える。「旅」はその基盤～
講 師：小長谷 有紀
国立民族学博物館名誉教授

4) 体験学習（心身の学）

テーマ：茶道を通じて体得する
「もう一つの知、身体知」
講 師：泉本 宗玄
茶道裏千家今日庵 業舩 教授方
お点前体験指導：本間 宗壽
茶道裏千家正教授・名誉師範

2024年春季

3月23日（土）～
3月25日（月）

人物学習型

＊対面・合宿方式で
開催



■セミナー参加者の声

- ・なかなか直接お聞きすることのできない講義を聞くことができ、討議がとても楽しかった。個人発表やグループ討議内容の発表準備など限られた時間に全力で取り組むことができました。
- ・いろんなバックボーンを持った人たちに出会い、死生観に関してのみにとどまらない、いろんな交流を通じてひたすらに生きる力と知識をもらいました。
- ・最初、苦手だと思っていた討論も、話を進めるにつれ、難しい内容ではあるけれど楽しい、もっと色んな知識を増やしたいと思いました。
- ・たくさんおしゃべりができてとっても楽しく有意義な経験になったと思っています。そして、自分の視野の狭さを改めて実感するとともに、世の中にはこれほどまでに同世代の博識な方々がいらっしゃると思うと私自身も努力する必要があるなと感じました。
- ・去年はオンラインで十分楽しめましたが、対面で行うことでより深く議論することができました。
- ・本居宣長に学ぶ 思想文学分野は日本人である事に誇りを持たせた。これは4つの講義に共通するものだと思う。自分の国（私）を深く理解することは、他の国（他者）を理解することに繋がるかもしれない。
- ・これからも初めて知る学問に数多く出会うと思います。出会った分野を拒否せず、好奇心を持って受け止められる人間になりたいです。

■これまで参加した受講生の所属校（都道府県順）

【高校 53校】岩手県 / 高田、埼玉県 / 筑波大学附属坂戸、東京都 / 富士見丘、富山県 / 高岡南、長野県 / 上田、市立長野、松本県ヶ丘 岐阜県 / 岐阜 愛知県 / 愛知、愛知教育大学附属、滋賀県 / 膳所、京都府 / 京都教育大学附属、京都光華、京都聖母学院、京都先端科学大学附属、嵯峨野、同志社国際、鳥羽、南陽、洛南、洛北、大阪府 / 茨木、大阪教育大学附属池田、大阪教育大学附属平野、大阪青凌、大手前、四条畷、高槻、豊中、三国ヶ丘、兵庫県 / 滝川、長田、灘、姫路女学院、奈良県 / 市立一条、畝傍、郡山、帝塚山、東大寺学園、奈良、奈良学園、奈良学園登美ヶ丘、奈良女子大学附属、西大和学園、和歌山県 / 和歌山信愛、島根県 / 津和野、広島県 / 英数学館、愛媛県 / 南宇和、福岡県 / 小倉、修猷館 長崎県 / 上五島、宮崎県 / 宮崎東定時制夜間部、沖縄県 / N 高等学校

【高等専門学校 1校】熊本県 / 熊本高専八代キャンパス

【大学 8校】北海道大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、畿央大学、広島大学



高校生・大学生等の「自主的な学びの場」の形成につなげる

■第2回ホームカミングの開催

＜開催趣旨＞参加者相互のネットワークを構築し、皆で学ぶことの大切さをあらためて認識する。

＜参加者数＞ジュニアセミナー卒業生8名、TA経験者・特任研究員など4名

＜開催概要＞日時：2023年8月26日（土）10：00～18：00

テーマ：『夏目漱石に学ぶ～西欧の模倣（外発的開化）を脱し、主体の確立（内発的開化）を～』（2016年ジュニアセミナー初回のテキスト）

内容：グループ毎の討議や全体での意見交換

■メインテキストの公開開始

2023年12月15日より、国際高等研究所ホームページで、ジュニアセミナーのテキストを順次公開し始めています。2024年6月時点で、25件が公開中です。これまでに蓄積されてきた知見を広く一般に公開するとともに、受講経験者の継続的な学びにつなげています。

寄付募集チャレンジ

「IIAS塾ジュニアセミナー」は、けいはんな学研都市地域にゆかりのある方々の、あるいはIIAS塾ジュニアセミナーに関心のある方々に支えられたものにしたいと考えています。現在、京都地域創造基金を通じてご寄付を募っています。

2023年度は、次の方にご寄付いただきました。（敬称略 五十音順）

小野 雅志、北岡 征翠、小西 倫子、中川 雅永、日根野 健

ご支援いただき、ありがとうございました。

●寄付者への謝意

・寄付者のご芳名を年次報告書（アニュアルレポート）に記載

●寄付募集とお問い合わせ先

公益財団法人京都地域創造基金

Tel 075-257-7883 <https://www.plus-social.jp/>

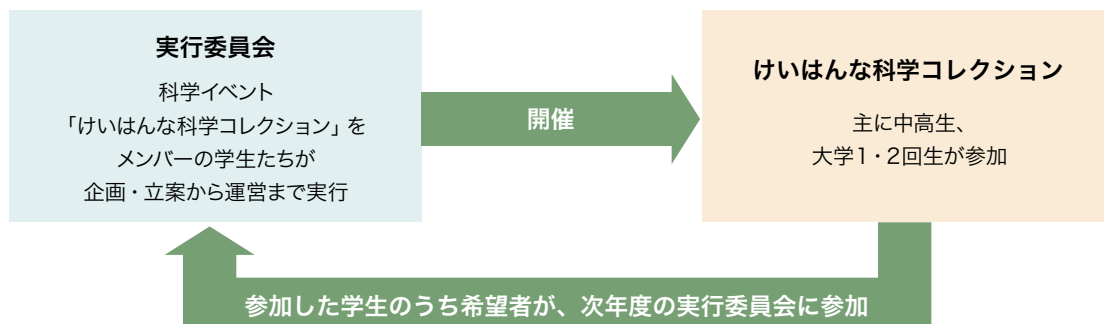
学生の学生による学生のための教養講座

この講座は次世代を担う若い世代を対象とした体験型プログラムです。自ら主体的に考え行動し、若い世代にむけたイベントなどの企画から運営までを学生が主体的に実施する「実行委員会」と、科学を身近に感じる「けいはんな科学コレクション」の2つのプログラムで構成されます。

■プログラム概要

	実行委員会		けいはんな科学コレクション
構成メンバー	大学生、大学院生	参加者	中高生、大学1・2年生
目的	(右の目的に加えて) ・自ら主体的に考え、実行する ・多様な人材と交流する	目的	・社会課題や科学技術に関心を持つ ・自分の将来の選択肢を考える
実施内容	・実行委員会ミーティング9回 ・研究者インタビュー6回 ・けいはんな科学コレクション開催 (2023年度は、2023年9月～2024年3月)	概要	・けいはんな学研都市の研究者と研究テーマを学ぶ (2023年度は、2024年3月20日開催)

■実行委員会とけいはんな科学コレクションとの関係（将来構想）



■今後の計画・期待される効果

けいはんな科学コレクションの開催に加えて、けいはんな万博関連イベントへの参加など学校内の活動では経験できない機会の提供を通して、自ら考え、自ら行動できる人材の育成を目指します。

2023年度の
活動レポートはこちら
(実行委員 企画・編集)



研究代表者

駒井 章治

東京国際工科専門職大学
工科学部情報工学科教授
国際高等研究所客員研究員



きづミーティング (集合知ネットワーク構築プロジェクト)

世界中で自然災害や政治的な動きなど予測不能な事象が続発し、社会の多様化が急速に進む中、迅速な情報活用が求められている。そのため、様々な議論や思考を通じて常に準備を整えることが重要である。この活動は、将来の国際高等研究所の活動方針を示す「何を研究するかを研究する」研究所として、積極的な取り組みを行っている。

参加研究者 (順不同) (所属・役職は2024年3月末時点)

氏 名	所属・役職
駒井 章治	東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授 国際高等研究所客員研究員
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター准教授 国際高等研究所客員研究員
杉谷 和哉	岩手県立大学総合政策学部講師
井出 和希	大阪大学感染症総合教育研究拠点特任准教授
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構教授
定藤 博子	摂南大学経済学部准教授
久木田 水生	名古屋大学大学院情報科学研究科准教授
安藤 悠太	京都大学大学院地球環境学学術特定研究員
阪井 英隆	パナソニック株式会社
西村 準吉	佼成学園女子中学高等学校
森本 智史	慶應義塾大学先端研究センター特任助教
田島 知之	京都大学宇宙総合学研究ユニット特定助教

研究目的と方法

世界はウクライナ侵攻、中東問題、COVID-19などの感染症、経済の悪化などで困難な局面に直面している。これらの課題に対処するためには、人類が結集し、日常的に議論を続ける必要がある。このプロジェクトでは、オンライン会議を通じて議論を進め、サイエンスアゴラなどの場を活用し、専門家を越えた議論を行ってきた。これにより多くのアイ

デアが生まれ、それらを具体化する活動も行われた。年に1度の集まりではなく、議論の機会を増やし、ネットワークを拡大することで、様々な知見を組み合わせ、素早く解決策を見つけるための準備を整えている。このプロジェクトでは、国内外の人的ネットワークを構築し、知識を深化させることを目指している。

2023年度実績報告

戦争や不寛容などの深刻な社会問題について、様々なゲストを迎えて議論し、将来の展望や解決策について考えた。アーティストのアート活動を通じて、命の尊さや活動の重要性を再確認した。これらの活動を基に、けいはんなエリアでアイデアが形になる場として発展していく。

2023年度研究会実績

通算第41回	4/25	杉谷直哉 (在野研究者)	「近代地方政治について」
通算第42回	5/30	スピーカー体調不良のため、参加者によるフリーディスカッション	
通算第43回	6/27	松嶺貴幸 (アーティスト)	「自身の死生観をもとに」
通算第44回	7/25	酒井敏 (静岡県立大)	「社会に遊びを」
	11/19	サイエンスアゴラ	「連携の価値と方向」
通算第45回	1/9	駒井章治 (国際高等研究所)	「けいはんな大学 (仮) について」
通算第46回	3/25	柴藤亮介 (アカデミスト)	「研究や学問の価値を今一度問い直す」



今後の課題・期待される効果

多様化が進み先が見えなくなってしまった現在。様々な視点や価値をつむぐことで私たちの進む方向を見定める必要性が高まっている。異なる専門性を持つ専門家や芸術家などが集まる「場」を作り、未来志向の知恵を結集し、社会に実装するための「核」を形成する。ここで生まれる様々なアイデアは社会に影響を与える可能性があり、未来に対応し、創造的な解決策を生み出すための会議体を構築する。このネットワーク構築のノウハウが将来に受け継がれ、進化していくことが期待される。

「けいはんな万博2025」への取り組み

2022年5月に「けいはんな万博全体構想」が策定され、同年10月の「けいはんな万博準備会発足」を経て、2023年11月9日に「第1回けいはんな万博運営協議会」が開催され、共同代表に松本紘所長が就任しました。

けいはんな万博2025の開催テーマは「未来社会への貢献～次世代への解～」。2025年4月から10月の期間を中心に、次の4つのフェスティバルや国際会議をはじめ様々な催事を展開します。



FESTIVAL#1：ロボット・アバター・ICT

けいはんな学研都市をロボットやアバターで賑やかな街に。人間の活動を助け、豊かにする様々なロボット・アバターの紹介。さらにコンピュータや通信技術、仮想空間、モビリティの活用等について展覧します。

FESTIVAL#2：ウェルビーイング

よりよく生きるために、最新の栽培技術、スマート農業、食品加工、流通技術、バイオテクノロジーなど「食」をめぐる課題、「健康」に資する研究等について最新の知見や技術を紹介します。

FESTIVAL#3：スタートアップ

けいはんな学研都市をスタートアップが競って集まる街に。国内外の様々なスタートアップや支援機関等が一堂に会し、ビジネスマッチングの機会拡大、産業活性化の推進等を図ります。

FESTIVAL#4：サイエンス&アート

科学と文化の融合による新たな価値の創造。科学技術を社会実装する装置としてのアート、科学技術の新たな用途を閃かせるアートなど、科学と文化や芸術の融合による豊かな未来社会のイメージを、けいはんな学研都市から発信します。

国際高等研究所は運営協議会の幹事およびサイエンス&アート部会のリーダーとなり、当該催事の具体化を推進しています。

年次報告書の発刊

2022年度の年次報告書「アニュアルレポート2022」を2023年7月に発刊しました。国際高等研究所（高等研）の活動をわかりやすく社会へ発信しています。



高等研報告書・高等研選書 (Amazonにて販売中)

高等研のこれまでの研究事業の成果の一部を「高等研報告書」、「高等研選書」としてまとめています。研究代表者の提唱する研究課題に対して、異分野間の研究者たちが数年間取り組んだ研究の成果や、高等研が主催する講演・シンポジウム・フォーラム等を収録・編集し、学問に精進された著者自らの語りをまとめたものを取り扱っています。詳しくは高等研ホームページをご覧ください。

(Amazonホームページからご購入いただけます。)

タイムリーな情報発信

ホームページの内容は常時改訂して高等研の活動を迅速に公表するように努めています。公式SNSでは研究会の活動報告、高等研が主催するイベントのお知らせや日常の出来事などをお届けします。



高等研ライブラリー

高等研の研究の方向性をよりよく理解いただくため、活動成果をまとめた研究報告書や「けいはんなゲートの会」のブックレットやジュニアセミナーのテキストをホームページにて公開しています。



右記のQRコードからご覧いただけます。



「高等研チャンネル」



右記のQRコードからご覧いただけます。



右記のQRコードからご覧いただけます。



関係機関との連携

高等研は国内外の関係機関と連携し、それらが主催するイベントの趣旨に賛同し応援、協力を行っています。

詳しくはこちら



研究企画推進会議

国際高等研究所は、研究事業の企画及び円滑な推進を図るために、幅広い学問領域からの学識経験者を委員とする研究企画推進会議を設置しています。本会議で出された先見と俯瞰に基づく助言や提言に学び、より有意義な研究事業の実施を目指しています。

委員構成（敬称略・五十音順）

議長



榎 裕之

奈良国立大学機構理事長
学校法人トヨタ学園フェロー
豊田工業大学名誉学長
東京大学名誉教授

委員



稲賀 繁美

京都精華大学国際文化学部特任教授
放送大学科目主任・客員教授
国際日本文化研究センター名誉教授
総合研究大学院大学名誉教授



小谷 元子

東北大学理事・副学長



高橋 義人

平安女学院大学
国際観光学部特任教授
京都大学名誉教授



中村 道治

科学技術振興機構名誉理事長



西尾 章治郎

大阪大学総長



吉川 左紀子

京都芸術大学学長・
同大学文明哲学研究所所長
京都大学フィールド科学教育研究
センター特任教授
京都大学名誉教授

研究企画推進会議は2015年度に発足しました。一期は2年で、2023年度より第五期に入っています。直近では2024年2月16日に開かれました。

研究活動については、以下のような、今後の糧となるご助言をいただきました。

- 学問が社会の基盤の一つとなるよう、個々の研究の集合に留まらず、それらが相互に繋がり、社会に何らかの貢献をすることが重要である。高等研の自主研究や公募研究には共通項があるゆえ、その横断性を生かした研究事業の深化と社会への貢献を期待する。
- 社会・国・世界などの視点から考えることはもちろん必要であるが、個人や地域の人々の歴史・文化・慣習・価値観などの視点も大事である。高等研のネットワークやけいはんな学研都市地域に位置する環境を生かし、両方の視点から研究を行ってほしい。
- 世界各国にわたるネットワークを駆使して国際的な視野をもった研究を行い、「国際」的な高等研究所であることを期待する。
- 大学では論文作成や研究費獲得を優先せざるを得ないが、真に必要なのは、研究分野・領域を越えた議論である。現在の学問における「本当の議論の場」を、高等研で実現できるとよい。

検討中の新たな研究員制度に関しては、以下のご助言をいただきました。

- 生涯勉強をしつづけ、定年退職したからといって勉強をやめはしないのが、人間である。それだけに、年齢にかかわらず研究を継続できるような制度が重要である。
- 若手と経験豊かな人との世代を越えた議論からこそ新しい研究は生まれ、年長者の経験や失敗談の伝授によって、若手のその後の人生は豊かになる。老若の集う場を提供することに、本研究所の役割がある。
- そのような高等研に滞在できることには大きな利点があり、新たな研究員制度においてもこの点を活用していきたい。

（文責事務局）



財務・決算報告

国際高等研究所（高等研）は1984年8月に財団法人として設立認可され、その後、制度改正に伴い2013年4月には公益財団法人に認定されました。高等研は設立以来、社会から受託を受けた貴重な財産を安全かつ効率的に管理・運用することに努めています。公益財団法人に求められる財務三基準を満たすことはもちろんのこと、さらに公益に資する活動の拡大に向けて、持続的な財務戦略の構築にも積極的に取り組んでいます。

高等研の資産構成

2023年度末においては、財団の基本財産として9億9千8百万円の有価証券等を保有するほか、運用資産（2022年度に資産運用規程などの改訂を行い、運用する有価証券について、基本財産から再分類を行いました。）29億1千9百万円などの特定資産、さらに研究所建物などの固定資産と預金などの流動資産をあわせて資産合計は52億3千7百万円です。

高等研の収支

2023年度の高等研の経常収入1億8千3百万円の内訳としては、基本財産や運用資産として保有する債券の利息など資産の運用収入が1億2千9百万円、自治体等からの補助金と企業・個人からの寄付金のあわせて14百万円、特別研究基金より研究活動に充当した振替額15百万円をそれぞれ計上し、さらに、その他として施設使用料など2千5百万円を計上しました。

経常費用は、事業費と管理費をあわせた結果、1億8千2百万円となり、2023年度の経常増減額は差引1百万円のプラスとなりました。また、修繕積立金への繰入額1千4百万円や減価償却などを除いたキャッシュフロー収支は38百万円のプラスとなりました。

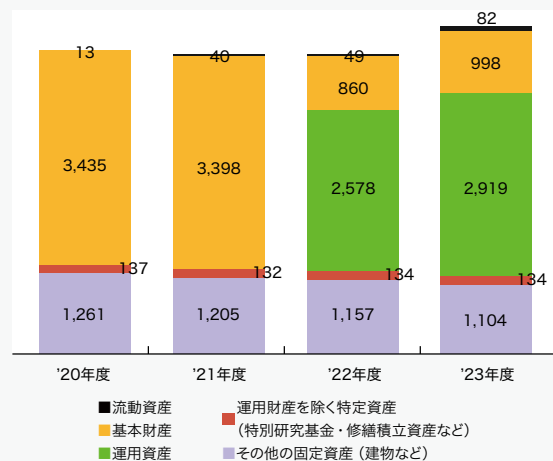
資産運用方針

財団の安定的な運営に資するよう、また公益目的事業を継続して実施していくため、財団財政上必要な運用益を、最低限のリスクで確保することを目指します。

上記目標を達成するために、GP I F（年金積立金管理運用独立行政法人）の運用方針を参考に、資産、地域、時間等を分散して投資することを基本とし、運用対象は、投資適格格付を有する債券または価格の透明性と流動性を有する証券取引所上場銘柄に限定しております。

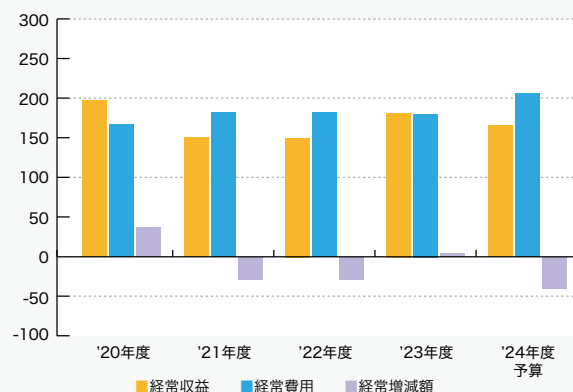
保有資産額の推移

（単位：百万円）



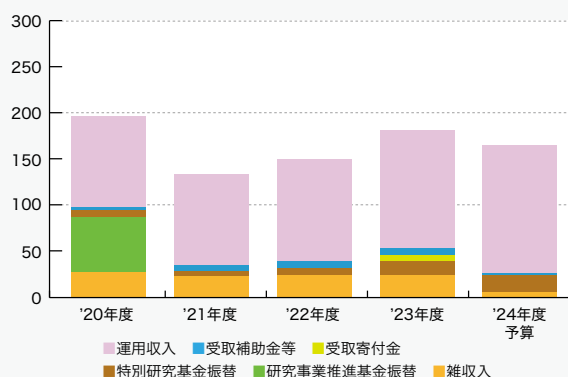
経常収支の推移

（単位：百万円）



収入（経常収益）の内訳

（単位：百万円）



貸借対照表および正味財産増減計算書

貸借対照表

(単位：千円)

科 目	2020年度 期末	2021年度 期末	2022年度 期末	2023年度 期末
I.資産の部				
1.流動資産	13,222	40,384	49,022	81,915
2.固定資産	4,833,970	4,734,342	4,729,681	5,154,660
1)基本財産	3,435,477	3,397,830	859,892	997,756
2)特定資産	137,460	131,870	2,712,546	3,053,289
研究事業推進基金	40,000	40,000	40,000	40,000
特別研究基金	93,000	87,310	79,310	64,310
修繕積立金	-	-	10,000	24,000
退職給付引当金	4,460	4,560	5,104	5,798
運用資産	-	-	2,578,132	2,919,181
3)その他固定資産	1,261,033	1,204,642	1,157,243	1,103,614
資産合計	4,847,192	4,774,726	4,778,703	5,236,574
II.負債の部				
1.流動負債	9,214	10,441	14,494	7,938
2.固定負債	12,656	9,397	6,582	5,798
負債合計	21,871	19,839	21,076	13,736
III.正味財産の部				
1.指定正味財産	3,568,477	3,525,140	3,557,334	4,021,247
2.一般正味財産	1,256,844	1,229,747	1,200,293	1,201,591
正味財産合計	4,825,321	4,754,887	4,757,627	5,222,839
負債及び正味財産合計	4,847,192	4,774,726	4,778,703	5,236,574

正味財産増減計算書

(単位：千円)

科 目	2020年度 決算	2021年度 決算	2022年度 決算	2023年度 決算	2024年度 予算
A.一般正味財産増減の部					
I. 経常増減の部					
1. 経常収益	198,418	134,095	151,510	183,136	165,050
運用収入	101,490	98,043	111,070	129,324	138,000
受取補助金等	850	7,482	7,158	7,068	1,100
寄付金	-	-	30	6,732	1,000
特別研究基金振替	7,000	5,690	8,000	15,000	19,000
研究事業推進基金振替	61,300	-	-	-	-
雑収入	27,777	22,880	25,252	25,012	5,950
2. 経常費用	167,877	162,673	180,841	182,344	206,262
事業費	153,634	147,213	166,253	168,652	189,350
管理費	14,242	15,460	14,588	13,692	16,912
(うち指定正味財産への振替額)	-	-	-	-	-
3. 評価損益等	5,682	-	△122	506	-
当期経常増減額	36,223	△28,577	△29,454	1,298	△ 41,212
II. 経常外増減の部					
当期経常外増減額	△12,275	1,480	-	-	-
当期一般正味財産増減額	23,948	△27,097	△29,454	1,298	△ 41,212
一般正味財産期首残高	1,232,895	1,256,844	1,229,747	1,200,293	1,150,141
一般正味財産期末残高	1,256,844	1,229,747	1,200,293	1,201,591	1,108,929
B.指定正味財産増減の部					
当期指定正味財産増減額	81,124	△43,337	32,194	463,913	△ 19,000
指定正味財産期首残高	3,487,352	3,568,477	3,525,140	3,557,334	3,542,334
指定正味財産期末残高	3,568,477	3,525,140	3,557,334	4,021,247	3,523,334
C.正味財産期末残高	4,825,321	4,754,887	4,757,627	5,222,839	4,632,263

組織

(2024年6月14日現在)

理事長

上田 輝久 株式会社島津製作所 代表取締役 会長

専務理事

和氣 弘明 株式会社島津製作所基盤技術研究所シニアエキスパート

理事

河合 智明 公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構常務理事

窪田 裕幸 京都商工会議所常務理事

関 総一郎 公益社団法人関西経済連合会専務理事

松本 紘 公益財団法人国際高等研究所所長
国立研究開発法人理化学研究所名誉理事長
京都大学第25代総長、京都大学名誉教授

監事

北岡 光夫 株式会社島津製作所エグゼクティブアドバイザー

高橋 一浩 公認会計士、税理士

評議員

浅見 徹 株式会社国際電気通信基礎技術研究所 (ATR)
代表取締役社長

糸井 弘人 株式会社島津製作所常務執行役員

大原 謙一郎 公益財団法人大原芸術財団大原美術館名誉館長

塩崎 一裕 奈良先端科学技術大学院大学学長

鈴木 一弥 京都府副知事

諏訪 正樹 オムロン株式会社執行役員技術・知財本部長兼
オムロンサイニックス株式会社代表取締役社長

立本 成文 総合地球環境学研究所顧問、京都大学名誉教授

原 史郎 近鉄グループホールディングス株式会社取締役専務執行役員

平野 俊夫 大阪大学名誉教授・第17代総長
公益財団法人大阪国際がん治療財団理事長堀場 厚 公益社団法人関西経済連合会副会長
株式会社堀場製作所代表取締役会長兼グループCEO

義本 博司 元文部科学事務次官、東京海上日動火災保険株式会社顧問

所長

松本 紘 理化学研究所名誉理事長
京都大学第25代総長、京都大学名誉教授

副所長

小寺 秀俊 京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授

チーフリサーチフェロー

有本 建男 科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授
国際学術会議 (ISC) フェロー

高見 茂 京都光華女子大学学長、京都大学名誉教授

主席研究員

鈴木 晶子 京都大学名誉教授

研究企画推進会議委員

榊 裕之 奈良国立大学機構理事長、学校法人トヨタ学園フェロー
豊田工業大学名誉学長、東京大学名誉教授 <議長>稲賀 繁美 京都精華大学国際文化学部特任教授、放送大学科目
主任・客員教授、国際日本文化研究センター名誉教授、
総合研究大学院大学名誉教授

小谷 元子 東北大学理事・副学長

高橋 義人 平安女学院大学国際観光学部特任教授
京都大学名誉教授

中村 道治 科学技術振興機構名誉理事長

西尾 章治郎 大阪大学総長

吉川 左紀子 京都芸術大学学長・同大学文明哲学研究所所長
京都大学フィールド科学教育研究センター特任教授
京都大学名誉教授

客員研究員

加納 圭 滋賀大学教育学系教授

駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部教授

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

特任研究員

秋山 知宏 神戸情報大学院大学情報技術研究科客員教授
京都光華女子大学研究職員

金澤 洋隆 祇園町醫院医師、徳洲会生駒市立病院非常勤医師

児玉 菜 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程

真鍋 公希 中京大学現代社会学部講師

山根 直子 京都大学人文学連携研究者、同志社大学ほか非常勤講師

渡辺 彩加 京都大学学際融合教育研究推進センター技術補佐員
同大学東南アジア地域研究研究所連携研究員

2023年度法人運営に係る会議開催実績

■ 評議員会

第92回 評議員会

開催：2023年6月6日（火）

第93回 評議員会

開催：2024年3月13日（水）

■ 理事会

第133回 理事会

開催：2023年5月11日（木）

第136回 理事会

開催：2023年12月5日（火）

第134回 理事会

開催：2023年6月6日（火）

第137回 理事会

開催：2024年3月6日（水）

第135回 理事会

開催：2023年9月26日（火）

■ 役員・評議員候補者選考委員会

第20回 委員会

開催：2023年5月19日（金）

■ 資産運用委員会

第63回 資産運用委員会

開催：2023年5月8日（月）

第65回 資産運用委員会

開催：2024年2月22日（木）

第64回 資産運用委員会

開催：2023年7月5日（水）

<専務理事の交代について>

2024年6月14日付で加藤 有一（前列右から二番目）が退任し、同日付けで和氣 弘明（前列右から一番目）が専務理事に就任致しました。



国際高等研究所 役職員

ひらめき、癒し、 思索と交流を創発させる「智の伽藍」。

かつて都であった、飛鳥・難波・奈良・京都に囲まれた、京阪奈丘陵の地。

国際高等研究所は、古来日本文化の中心である、このけいはんな学研都市に立地しています。

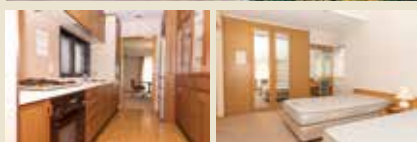
豊かな自然環境と落ち着いた建物が融合し、日本特有の風土・文化と繊細な感性を活かした静謐な研究環境は、
高等研究の場としてふさわしく、研究者たちの英知や発想を創発させます。



高等研バーチャル
トリップはこちら



施設フォト
ギャラリーは
こちら



■ 家族用住宅
(Aタイプ: 延床面積157㎡ 収容人数: 4~6名 4LDK 3棟)
(Bタイプ: 延床面積139㎡ 収容人数: 3~4名 3LDK 3棟)



■ 単身者住宅
(1ベッドルームタイプ 30㎡ 収容人数1名 8戸)



■ 茶室「雅松庵」
(数寄屋造平屋建 延床面積 61㎡)

■コミュニティホール
(延床面積289㎡ 収容人数50～100名)



レクチャーホール



■セミナールーム1
(延床面積70㎡ 収容人数30名)



■セミナールーム2
(延床面積70㎡ 収容人数30名)



■セミナーラウンジ
(延床面積160㎡ 収容人数30名)

敷地面積 40,167平方メートル
建築面積 5,252平方メートル
延床面積 6,039平方メートル

正門



■和室
(延床面積70㎡ 収容人数6～8人)



■研究個室
(延床面積 25㎡)



■レクチャーホール
(延床面積240㎡ 収容人数126名)

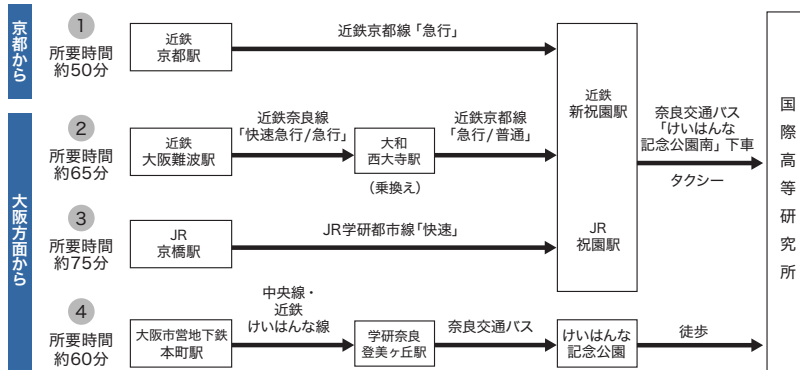
けいはんな学研都市 広域地図



周辺地図



電車・バスをご利用の方



お車をご利用の方

京奈和自動車道「精華学研IC」より約5分。
駐車場（無料）をご利用いただけます。

空港からのアクセス

- ▶ 関西国際空港 → 大阪上本町駅までリムジンバスで約50分。
- ▶ 大阪国際空港（伊丹） → 大阪上本町駅までリムジンバスで約30分
大阪上本町駅から近鉄けいはんな線「学研奈良登美ヶ丘駅」まで約45分。
学研奈良登美ヶ丘からバス・タクシーで約15分

**公益財団法人
国際高等研究所**

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005
<https://www.ias.or.jp/>

